

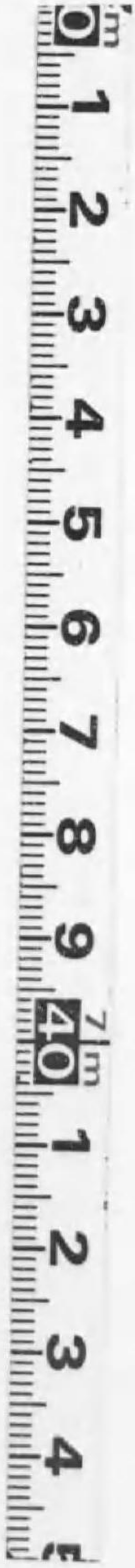
特 116

178

妊婦必讀

安産の心得

全



始



特116
178



安産の心得

全

大正
8. 6. 20
内交

序

女醫吉田賢子曾テ我産科學講義室ニ遊フ年
アリ頃日「安産の心得」一冊ヲ著シ予ニ示ス一
讀子ノ熱心世ヲ益スル多キヲ認ム書中載ス
ル所叮嚀能ク意ヲ盡ス文章平易婦女子ヲシ
テ能ク會得セシムル一小冊子首尾完結近來
ノ珍本ナリ茲ニ一言ヲ附シテ世ニ紹介ス

醫學士 櫻井郁二郎

序

妊婦分娩保育は婦女子の畢生の重大なる義務にして健康にして伶俐なる兒を擧んと欲せば妊娠中の保養を怠る勿れ又人は胎内にある間の母の氣を其儘受くること多く此を胎養といふ此を以て妊娠分娩保育の重大なる所以なり夫の聖教を天下後世に垂れたる孔孟の如きルイテルの如きクロンツェルの如き夫の米國の獨立を遂けたるワシントンのの如きナポレオンの如き皆婦女子より出つ故に婦女子の社會に對する功少なからず功大なれば隨て義務も重大なり夫の孔夫子の如きは幼時嬉戯するに神に事ふるの禮節を以てせりと又孟軻には幼時其母に三遷の教ありと此

の如き母にして如何て胎養なからんや此の如く胎養大切
 なるものなれば婦女子たるもの片時も忘れることなく精
 神を淫猥なる談話及鄙猥なる稗史に注ぐことなく古來の
 英勇豪傑等の傳記を讀み又婦女の龜鑑となる如き人の傳
 記等を讀むべし如何に伶俐なれ共健康ならざれば何事も
 なす能はず健康を保つことも片時も忘るべからず故に妾
 大方貴婦人各位の爲に妊娠分娩產褥保育等の心得を略記
 し名づけて妊婦必讀安産の心得と云ひ若し此に由て各位
 の妊産保育の一助とならば妾の幸ひ之に過ぐるものなし

著者識

必妊婦安産の心得附育兒法目次

月經閉止	一
月經中の攝生	三
飲食物の嗜好	四
惡阻	四
精神の變常	五
乳房の變化	六
陰部の變化	六
腹膨大部	七

胎動	九
胎音	〇
心音	〇
妊娠中の攝生	〇
一般衛生	〇
衣服	一三
縷帶	一四
履物	一五
頭髮	一六
居室	一六
運動	一七
就眠時間	一九

精神上の攝生	二〇
夫の義務	二三
乳房の準備	二五
清潔	二八
大小便の通利	二九
産婆を雇ふ時の心得	三〇
産室の用意	三一
分娩	三五
産湯の使ひ方	三八
産褥中の心得	四〇
産時の衣服	四〇

産後の日立	産褥婦の用事	乳熱	産褥婦を訪問する心得	精神の攝生	身體の攝生	陰部の所置	悪露	大小便の通利	飲食物	産婦の臥床
.....
五三	五一	四九	四八	四七	四六	四四	四四	四三	四二	四一

育兒法目次

頭巾	衣服の注意	衣服	精神の發達	初生兒の脈膊及び呼吸	臍帶脱落	早産兒の状態	生兒體量表	健康なる初生兒の状態
.....
六六	六四	六三	六二	六一	六〇	五八	五八	五八

足袋	六六
月代	六七
赤兒の臥床	六八
赤兒の居室	六八
宮詣	七二
赤兒の啼くは如何	七三
入浴	七四
歯牙發生	七七
小兒乳養の事	七八
小兒に乳を授くる母親并に乳母に攝生法	七八
授乳時の心得	八二

初乳球の事	八三
離乳の事	八四
乳房の保護	八五
母乳を與へざる場合又は中途にて斷乳すべき場合	八五
乳母の撰び方	八八
人乳の成分	九〇
乳母の臥床	九二
乳母の飲食物	九二
乳母を雇ひたる母親の心得	九四
人工營養法	九四

過量の牛乳を與ふるの害	九八
煉乳(コンデンスミルク)の成分	九九
人工營養品	一〇七
一年以上の小兒養育法	一〇九
飲食物	一一〇
副食物	一一〇
嗜好物	一一一
口内清潔法	一一一
容姿	一一二
美容	一一三
種痘	一一四

小兒の疾病并に養生法	一一九
小兒は身體軟弱	一二一
糜爛	一二二
小兒の便秘并に下痢	一二三
吐乳	一二三
驚口瘡	一二三
鼻加答兒并に扁桃腺炎	一二四
眼の攝生法	一二四
耳の攝生法	一二五
小兒の癩はるゝ事	一二五
小兒蛔虫	一二五



必妊婦 安産の心得 附 育兒法

女醫 吉田賢子著

妊婦とは婦人の体内に生じたる卵子胚胎して子宮内にて發育しつゝある間に言を換ゆれば其の胎を受けてよ
り出産迄の間を云ふものにして大抵四十週即ち二百八十
日を云ふなり
月經閉止 凡て世の中に女性と生れしものは一定の時期に

必妊婦 安産の心得 附 育兒法 目次終

跛	腺病	尙健病	小兒傳染病	傳染病諸病	傳染病豫防法	博染病豫防法	體温器の用法	小兒に藥劑の飲ませ方	牛乳貯蓄法并に授乳器の扱ひ方
.....
一二五	一二七	一二八	一二九	一三〇	一三一	一三二	一三五	一三六	

至れば月經と稱して陰部より出血するものなり此時期は
 氣候に關係するものにして熱帯地方にては八歳より始
 まるも我が日本にては大抵十四五歳より始まり四十五
 歳位にて終るものにして其間は四週間即ち二十八日毎
 一回づゝ二三日より五七日間位反復して來るの通例なれ
 ども人に由り速きことあり遅きことあり又日數も人に由
 りて長きあり短きあり腹部及び腰部に疼痛及び壓重等の
 人あるも大抵は下腹及び腰部に疼痛及び壓重等の感あ
 り此感覺は時として上腿まで波及するごとあり此等同時
 に身体倦怠疲労を覺え睡眠を催し思考力記憶力等減する
 ことあり

月經中は身體を攝養すること肝要なり即ち神身共に安
 になし身體を強く動かし或は冷却する等のことは避くべ
 し故に舞踏をなしたり通常月經時より下腹部及び腰部の
 いる様注意すべし又通常の月經時より下腹部及び腰部の
 疼痛等甚だしき又は出血の量多きか日數の長きか眩暈
 耳鳴心悸等を發する時は婦人科醫の診斷を受くべし
 從來月經を整然に來りたる配偶ある婦人の急に月經閉止
 る時は大概妊娠に來りたる配偶ある婦人の急に月經閉止
 れども時として子宮及び卵巣の疾患又は腫腸等月經閉止
 閉止するごとあり又妊娠したるも三ヶ月位は月經の來
 るおどあり斯くの如く初期に於ては斷定六ヶ月位は月經の來

れば若し不注意不攝生の爲めに墮胎流産等のおどありて
 は婦人たる身の大過失にして大恥辱とも云ふべきものな
 れば右に述べしは只一の微候となるのみにして此のみに
 て断定すべきものにあらす
 飲食物の嗜好 月経閉止と同時に來る一微候にして從來好
 みたる食物を急に嫌ひて反て此まで嫌ひたるものを好む
 ことあり凡て酸味淡白のもの嗜み食氣は或は減じ或は
 増し屢々不正を來して時々惡心嘔吐等を起す此を惡阻と
 云ふ
 惡阻 月経閉止と同時に來り胸の内にて不快の感覺あり且
 つ 屢々嘔氣を覺え又は食物及び水様の物を嘔くことあり

殊に早晨空腹時に多く食物を取るの後治するものなり重
 き時は食物を見るか又は思ひ出したるのみにても發する
 ことあれども大抵は一二月長きも三四ヶ月位にて治す
 るものなれども極めて頑固なるものは妊娠中持續するこ
 とあり
 精神變常 月経閉止と同時に神心鬱悒して些少の刺戟にも
 憤怒り驚き易く恐懼れ悲み或は頭痛を覺ふるあり齒痛を
 感ずるあり強き動悸の爲めに胸苦るしきを患へ又夜間に
 は熱睡し難く魔しき夢を見るおどあり此等は皆精神感動
 の發揚したる結果にして妊娠の初期に見る所なれば眞に
 妊娠なる時は其感動の過敏なるは決して病的にあらすし

て唯だ懐妊せる子宮より交感上に來る現症にして即ち受
孕したる卵子の漸く發育するに從て子宮の形愈々變大し
て其周辺の諸臓器を壓迫し之れが爲め諸種の異常感覺を
惹き起すものなれば別に心配するにも及ばざれども若し
此現症亢盛して臥床するに至る時は病的なれば醫師の診
察を受くべし
乳房の變化 妊娠二三ヶ月より漸く乳房は膨大し且つ乳
井に其近傍は黒褐色となり六七ヶ月に至れば少しく水様
の液を分泌す又腹部正中線に沿ふて褐色に變ず此變色は
體質に由るものにして初妊と經妊とは關係なし
陰部の變常 月經閉止後陰部の分泌盛んに平常より稀薄く帶

白水様となり陰部は二三ヶ月より一般に黒色を帶ぶ
腹部膨大 妊娠二三ヶ月に至れば下腹部を壓する時は少
く手に抗抵するものあり滿六ヶ月に至れば臍にまで達し九
ヶ月になれば心窩(水落)に迄達し拾ヶ月になれば少しく下
りて前方に突き出すものなり然れども子宮卵巣等の腫瘍
にて腹部漸々膨大して恰も妊娠の如き微候を來すことあ
れば注意すべし又妊娠中子宮の膨大して近隣の臓器を壓
迫し爲めに尿意頻數となり尿量増加し又は尿閉を起し全
身に浮腫を來すことあり又尿失禁を起すことあり故に此
等の症候餘り重き時は醫治を求むべし
以上述べしは妊娠の徴候なれども時として子宮卵巣等

の腫瘍又は病にて之迄月経不正なりしもの急に閉止し二
三ヶ月に至り下部に異常の感あり殊に胃腸等に病を
有つ人は食氣變常胸下不快の感嘔氣等ありて身体倦怠
を併發する故に妊娠と誤想し放置する時は病魔は思ふ儘
に五体の諸臓器を侵襲して遂に治すべからざる難症に陥
ることもあるも測り難し此に反して眞性の妊娠に伴發する
惡阻其他の徴候を病なりと誤想して種々過當の治療を加
へて一頓に抑壓する時は墮胎流産等を催起して天然の幸
福を障害するの大過失を招くものとあるも測るべからず誠
又慎しむべきことにして原來病變と妊娠とを區別するは
誠に困難なることにして殊に初妊の婦人に於て然り又醫

家と雖も二三ヶ月の間は確診するおと難し故に以上述べ
たる月經閉止飲食物の嗜好惡阻精神變常乳房の變常陰部
の變常腹部膨大等の徴候あるときは必ず醫師の診察を受
け指揮に隨て所置すべし又妊娠の確實なる徴候は左の如
し胎動胎動とは子宮内にある所の胎兒の動搖を感觸する
なり始めは少しくピク／＼する位なるも後に至れば他人
の手を觸れても感觸するものなり此胎動は妊娠十八週よ
り二十週位より始まるものにして此れは妊娠の一の確な
る徴候となり且つ分娩期を豫知するに最も必要なるもの
にして胎動の初まりてより二十週位まで分娩するものな

心音 胎兒の心臓音は妊娠五ヶ月の交に至れば聴き取る
ことを得るものにして此は妊婦の臍の右下方に聴き取る
おと多し

妊娠中の攝生

一般衛生と大差なく只一般衛生は各人守るべき所にして
妊婦の衛生は胎内の兒體の上にて保護の念を及ぼし母
兒兩體共に有益なる様心懸くるの差別あるのみ例せば平
素は舞踏とか旅行とかをなし殊に人力車にて不平坦の道
を走らしめ又田舎の婦人なれば農事を營む等にて運動や

勞力が過劇となり且つ重荷を擧げて努力したり洗濯等を
なす時は腰部の屈伸劇しき等は常體に於ては害なきも妊
時には胎兒上に就て餘り宜しからず此れ腹部及び腰部に
劇しく振動を與へたる爲に流産及び早産を惹き起す恐れ
あり故に妊婦自體のみの攝生方ならず胎兒上及び分娩に
大關係を有するものなれば其嚴守すべき攝生方を身體上
と精神上とに大別して簡單に述べ
妊娠したる時は飲食物の嗜好平常と異なるおとある者に
して此迄濃厚なるものは食物の嗜好平常と異なるおとある者に
を好み又平日より食欲は亢進する常とす此れ自然の良機
能にして此増進に任せて過食する時は胃腸を害するもの

ならば腹内に停滞せぬ様に注意すべし過食は自體のみならず胎兒に害あり又餘り少きに過ぐる時は自體と胎兒との發育を障ぐるものなれば適當に腹内を満す様に食物をなすべし此時の食物は淡白にして消化し易く刺激性にあらずるものを選び取り交せて用ふべし常食なる穀類に魚肉鳥獸肉等を野菜と取り交せて用ふべし馬鈴薯赤根菜蕪菁菜等の新鮮なるものを少しづゝ取るは宜し又飲料としては一たび沸たる清水を最も良しと稀薄なる茶珈琲等もよし然れども濃厚なるものは害あり此は俗に云ふ血をあらすものなれば用ふ

べからず其外牛乳肉羹汁等は宜しく又熟したる菓物及び煮たる菓物は害なし此は皮及び核は去るべし衣服は寒さを防ぎ暑さを凌ぎ軀軀を蔽ふて醜体を現はさざる目的なれば成べく軟かく暖なるものを良とす特に襪着なせはフラルル紋羽メリヤス等を宜しとす上着は各自の好む所に任するも華美の服や細腰矯態の容姿を望む等は妊婦衛生上の要旨を補ふに足らず妊婦は日に月に子宮の擴大するに由て腹内の諸臓器は追々壓迫せられるものなれば和服等に於ては當時は廣く硬く成べ尤も害あるものなれば和服等に於ては當時は廣く硬く成べく「シャン」としたる帯に大なる帯揚げにて高く負ひ上げて結ぶ

こど流行すれど此等は害あり又洋服は胸帯にて絞める
故此を緩にする様注意すべし凡て洋服は腹部を狭くするもの
ひたるものなれば妊婦時には注意して成べく寛なるもの
を用ふべし若し強く緊迫する時は胎兒を壓迫し内臓の轉
倒を來し更に横隔膜を起すおれば及血の運行を妨げ此
に由り種々の障害を起すおれば及血の運行を妨げ此
成るべく汚れの目に立つものを着用する時は衣服及び付属品は
結帯古來より用ふるをよしとす用ふべし時々洗濯して清潔
り此は布にて腹部を巻くなり此は尤も至當の法にして殊

に數回妊娠せる爲めに腹壁の弛緩せる婦人には必要なり
此れ妊娠せる子宮を支へ胎兒の變位及び腹壁の弛緩并に
突出等を防ぎ且つ腹部を緩め臨月に及ぶも尙ほ母体の運
動を易からしむる爲に用ふる日本製の軟かき木綿を一度煮沸て
からず此に用ふる布は日本製の軟かき木綿を一度煮沸て
乾燥加したるものを用ふべし
腹部より足脚なご冷却し又は潤すは宜しからず故に足袋
を着き軟かきフタルの如きものに造りたる腰巻をな
すべし又外出する時などは高き重き下駄杯は躡きて流産
早産等を惹き起し且つ疲労し易きものなれば成べく輕き
ものを撰ぶべきものなり

頭髪は時々洗ひ静かに櫛りて緩く結ぶべし洗滌の際寒胃
 を防ぐべし頭部を緊結し又は冷却する等は頭痛齒痛等を
 起すものなれば注意すべし住居日本風の家に住するを良
 の建築大に増加せり之れ衛生上に宜し然ども和洋兩様
 共に注意すべきは新鮮の空気を吸入して夜中溜りたる
 要なるものを新鮮の空気で交換すべし又密閉したるに
 不潔空気を新鮮の空気で換すは宜しからず此れ炭火の附
 火鉢暖爐等の火を發すの空気を發すは宜しからず此れ
 は炭酸を發するものなればなり故に他室にて發したるも
 のを持ち運びて置くべし

多人數集する家屋即ち劇場寄席演説場等に行遊するは
 多人数集する家屋即ち劇場寄席演説場等に行遊するは
 宜しからず此等多人数なれば空気が不潔となり易く爲め
 頭痛眩暈等を換び起すことあり運動は衛生上甚だ緊要なる
 即ち庭園に遊び郊野に歩する等は宜しきものなれども妊
 娠數月を重ぬるに於ては乗車遠足等は宜しからず又不時
 妊婦は兎角倦怠を覺え安逸を求むるものに此等は時に
 あり坐睡等は反つて精神を不快になすものなり
 婦人は家事を主るものなり
 は從來の習慣の如く適當なる家事を主るを宜しとす此れ

一は精神の鬱を散すの益あり然れども交際の爲め乗車
 し舞踏するか又は高聲に唱歌する等の如きは腹壓を増し
 爲めに流産早産等を惹き起すことあれば注意すべきもの
 なり
 休憩も運動と相ひ對して必要欠くべからざるものにして
 動靜も覺其度を失すれば遂に神身を傷ふおとあり即ち夜
 は休憩時にして晝は動作時に充つるは自然の常理なれば
 私欲を恣にして晝寢をなむ爲めに夜は寢を催さずして翌
 日に至れば精神恍惚となり或は感冒に罹ることあり又睡
 眠時は室内を適宜の暖氣に保つべし寢具も冷暖其度に適
 するを宜しとす

就眠時は大約八時間を要するも身体及び精神を勞する
 と多き時は此を償ふ爲め多く眠を取るべし
 浴湯は常の如く行ふべし身体清潔は衛生上甚だ効あり
 し汚れたる時は皮膚の機能を害し外氣に侵されるために
 感冒に罹り易し故に全身浴を嫌はゞ坐浴にても宜し殊に
 妊娠の末期には浴湯するおと必要なり
 又温浴冷浴何れにても各人の好むに任せて宜しく温浴は
 攝氏三十七八度位にて宜し餘り高温なる時は頭痛眩暈動
 悸等を起し時としては温湯にて一日に二回づゝなすべ
 生殖器を洗滌すべし微温湯にて一日に二回づゝなすべ
 し若し病などある時は醫治を求め又は薬液を乞ふて充分

洗滌して清潔になし置くべし
精神上の攝生は身体上の保護と並び行はれて必要なるものなり兎角婦人は溫柔にして謹慎なるものなれば小事たりども心配するものなるに殊に妊娠中は此性一層甚だし
く鬱懣と快活するものと交々來り且つ傍人殊に父母姑舅
等の撫愛に刺へて漫りに苦惱を告げ且つ輕少の病狀を重
体に苦慮し遂に種々の病を發起し胎兒を害することあれ
ば慎むべし
憤怒驚愕嫉妬怨恨悲哀恐怖戀愛等は精神を亢奮し又は沈
鬱せしめ血行を障害する故種々の病を起すことあれば避
け得る丈けは避くべし凡て安靜快樂にして愛情と行く末

の樂しみを以て日を送る様心懸くべし
年若き初妊婦人は妊娠及分娩に經驗なきより種々
の憶想を起し分娩の時等々を苦勞するものなれば經驗あ
る人より能く々々注意して充分安心を與ふし俗に云ふ
案ずるより産むが安しとの諺の如く左程心配するに及
ばざるなり妊娠も娩出も皆生理的の現象なれば決して難
産を惹き起さすべきものにあらざるなり
妊娠中は兎角無益の考へをなすこと多く例へば胎兒は無
事にして五體も整頓し居るや否や若しくは胎動少しく無
弱なる時は胎兒の生命に恙なかるべきや否や己の身体に
斯く不快を覺えては追々流産や早産を起しはせぬや又疾

く歩みたるが厥き倒るゝ等のことありたるより身体に劇
動を興へたれば胎兒を損傷しはせねか若しくは夫れが爲
めに胎癢となりはせぬか若し胎癢となりたる時は我が罪
深く且つ恥大なりなと思ふて傍人にも語らず獨り意中よ
秘し置きて憂慮するが如きは反て無碍の胎兒を傷ふおど
あるものなれば身体及び精神の異常を覺えたる時或は過
失の後等は醫師の診察を乞ひ此に所置を任せて安心する
こと肝要なり醫師の診察を乞ひ此に所置を任せて安心する
娠中に閱讀すべき書物は先づ意味の平穩なる文章の平
易なる成べく精神を深く感動せざるものを撰ぶべし殊に
胎教といふおどあり娠中の母の氣質を其儘に受くるこ

どあり又或る婦人の如きは一旦他に嫁したるもの離婚の
後數年を経ても再嫁し小兒を擧げしに其先夫の容貌及び
氣質を其まゝ受けたる例あり故に妊娠中には古人の金言
英雄豪傑の傳記等を読み又歴史等も甚だしく感
情を惹き起す等のものは宜しからず稗史小説等も宜しき
も只一般人情を著したる上には地理風景等を加へたるも
の若しくは道徳上又は教育上等の如きもの餘り猥褻なるものは讀
者を撰ぶべし稗史小説等の如きもの餘り猥褻なるものは讀
むべからず娠中は身体精神共に攝養するおど怠るべから
夫の義務娠中は身体精神共に攝養するおど怠るべから
す妊婦の心掛くるは固より傍人も成べく安心させる様務

ひべし殊に夫たるものは常に注意して安心させる様にな
すべし兎角嫁姑の中は宜しからぬが多きものにて此等の
爲めに妻の甚だしく心を痛むを見たる時は産科病院なり
又は他所へなり暫く遠けて保護すべし然るに稀には其
るに及て家中に歸る様になし保すべし然るに稀には其
の妻の妊婦中は家に居ること少く日夜外出して偶々家に
居る時は他人の如く又少くは家事に忙し心ならず及ばし
は夫れがため種々に心を痛め遂には其害胎兒に及ばし
生兒虚弱なるか又は智識の欠くるおとあるものなれば夫
たるものは注意すべきことなり
此迄は妊婦より六七ヶ月迄の攝生法を述べたれば之に次

で必要なる二三を述べし
妊婦六七ヶ月以後は分娩産後及授乳等に充分なる
準備をなすべし即ち妊婦六七ヶ月に至れば乳房及び胸部
より腋窩等まで日に二三回微温湯にて石鹼を塗布して洗
ふべし兎角中流以上の社會にありては無病健康なるにも
關らず自分の生みたる小兒に授くることとなく乳母又
は牛乳などにて養ふおと多く殊に此を以て恥とすること
なく反て見榮となし居るなり我日本のみならず歐米の如
き文明國にて乳母又は牛乳にて養ふこと多し此は小兒
に乳を哺する時は交際場裏に立つ妨げとなり且つ容貌を
れて早く年老となるし又は自分の職業の爲めに小兒を

養育し居るおどの出来兼る場合あり。凡て妊娠を天の幸
 福となさば授乳は常然のお体内の胎児を養ひ生るれば止
 みて此月々失ふ所の血液に於て胎児を養ひ生るれば止
 此血液は乳汁となり分泌するものにして若し授乳せざる
 婦人は顔色蒼白となり産後の立ち悪く下り物も長
 くして精神のすぐれざるも漸々濃厚小児に對しては天
 の配劑なれば發育の度に隨つて漸々濃厚小児に對しては天
 るものなり然れども左の場合には乳せしむべからず
 母親の身体虚弱にして乳汁の分泌せざるか又は貧血に
 母親の病と血友病脚氣心臓病結核神經病癩癧へステリ
 ー梅毒癩病乳房の欠損等あるか又は母親に腫瘍などの
 一

を定めて哺乳せしめ得ざる時即ち教師交際多き人及び母
 親の乳を哺せる時は咄乳青便などのあるか小児の發育せ
 ざる時等なり
 小児に授乳するには乳嘴は成る丈け小児の含哺に便なら
 しむべし初妊婦にありては乳嘴の房内に凹陥し居りて含
 哺することの出來ざることは此時は乳娘五六ヶ月より
 乳嘴を示し中指指の先にて摘みて引き延ば
 すべし若し乳嘴及び其近傍智覺過敏なる時は酒
 精焼酎フランデー醋等に於て數々拭ふ時は漸々に
 治癒るものなり又乳房硬はばりたる時はワセリン、オレ
 フ油等を塗布て置く時は治るなり又此近傍に腫瘍などの



生たる時は醫師の治療を受くべし
妊婦中殊に臨月に近きたる時は外出を禁ずべし殊に寄席
芝居演説場等の如き多人数の集會する場所又は腕車にて
驅け廻り且つ夜會等に舞踏をなすなどは宜しからず又
妊婦中に病に罹りたる時は早く適當の治療を加へて危難を
未だ發さぬ内に防ぐべし若し發りたるも成丈け輕き内に
防ぐべし殊に産褥に至る迄には充分健康となり居る様心
掛くべし例へば咳嗽下痢腹痛生殖器病并に諸種の傳染性
病等は妊娠を妨げ産褥の経過を不良ならしめ且つ分娩時
の良機を妨ぐることもあり故に自身を健全になす様心懸くべ
し其他妊婦の末期に及んで子宮膨大し且つ少しく降下

するに由て骨盤内諸臓器を壓迫し爲めに兩便の通利を困
難ならしむることあり此等の輕きものは妊婦の免るゝこ
と能はざるものなれば産婆の所置に任せ灌腸法を行ふ位
にて宜しきも若し頑固なる便秘若しくは尿意著るしく頻
繁となりたる時は醫師の治療を求めむべし
妊婦五六ヶ月に至れば産婆を頼み置くこと必要なり産婆
は分娩と産褥に向つて十分なる豫備を補助し且つ出産時の
万端を取り扱ふ等は一身に引き受けて不都合なき様にな
す義務を有つものなれば十分熟練して且つ立ち働きの實
々敷ものにて親切に正直なる人を撰ぶべし故に醫家の紹
介を請ふて充分に右の個條を備へたる産婆を頼むを宜し

とす 産婆の熟練は生児并に産婦の幸福に關係するものなれば
充分注意して頼むべし又分娩五六週前に至れば産婆は一
度來訪せしめて互に近き置きて不都合なき初妊婦
人にありては万事産婆に謀りて小兒の衣服を作
し其他出産に近きたる時は常心に懸けて小兒の衣
襦袢を整理せしめ置くべし又産婆を雇ひて産室及び
を整理せしめ置くべし此れ妊婦及び産室の経過は妊
婦の病的者のにあらざりて生理的のものなれば自己の
體は平日と病的の者にあらずして生理的のものなれば
兒の爲め十分攝生を守るべし

右の如く分娩準備出來たる上は精神を一層安
にして夫の幸福なる期日即ち分娩の日を待つべきのみ分
娩なるものは妊娠の尤も終りに於て營む機能にして此
由て母体内に繋着發育したる嬰兒を体外に生み出して自
立の生活の状態に變せしむる働きなり
出産に先ち用意し置くべきは産室なり我が日本にては
兎角少なき薄暗き室にて産婆及び手傳人等の立ち廻るに
不自由なる程狭き室多きも此は大なる間違にて成るべく
廣く明くして天井も高く濕氣を含まざる室を隅なく掃除
して適宜に乾燥せしめ新鮮なる空氣を保ち他の塵埃炊煙
等の流入せざる室に暖爐又は火鉢を入れ適當の温度とな

し夏期なれば成たけ冷しくして静穩なるをよしとす又産
 室は二間續き居る時は便利なり即ち一間は産婦及び嬰兒
 の居間とし隣室は産婆及び看護人等の居間とし且つ隣室
 より時々々々隔て障子又は襖等を開放して夏は冷かなる冬は
 暖かき新鮮なる空気を流通せしめて同時に積蓄する所の
 不潔空氣を流出せしむるの便利ありて此の産室は直接に外
 氣の入る時は夏は熱冬は冷氣入りて産婦の爲めに宜しか
 らず
 室温は華氏の寒暖計七十五六度を適當とす
 産室には産婆看護人の外は親戚朋友たりとも濫りに出入
 することを禁すべし

産室に用ふべき品は清潔なる護膜布又は蠟紙を用ふるを
 良とするも吾國にては最も適當にして便利なるは桐油紙
 なり此桐油紙は使用前に五十倍位の石炭酸水にて洗ひて
 乾かし置くべし此上に適當なる綿布又は麻布を置きて
 出を受くべし此布片は新しくして防腐せるものを油紙を敷
 古來の習慣にて産時には薬薦を置き上に桐油紙を敷
 きて其上に古綿又は古布片等置きて羊水を受く例な
 れども此の古綿又は古布片等置き病毒等の潜み居り
 たる時は産婦及び生兒に救ふべからざるの大害を興ふる
 ものなれば成るべく新生しき布片を防腐して用ふべし若し
 古き品を用る場合は成るべく新しき布片を防腐法を行ひて
 後に用ふべし

し又産婦は麻にて毛髪を束ね且つ頸に掛ける古例あれども
 別に害なきものなれば各自の随意たるべし
 産湯に供する湯鹽石鹼又は鶏卵蜂蜜及び手巾數條を整へ
 置くべし其他炭酸及び弱き石炭油は産婆も用意せしむ
 べし又三百倍位の硝酸銀水も用意し置くべし此等は創所
 及び産湯に用ふる爲なり
 前に述べし如く産室の設け方に就ては充分なることは上
 流社會にあらざれば倒望むべからざれば強てなすにも
 及ばず只各人其心得にて防腐を充分になすあを勉むべ
 し此防腐及び清潔は心掛けにて十分なし得るものなり左

に分娩機能の大器を述べし
 に出産の催しある時は早速に産婆を招きて其診定を頼み生
 兒及び産婦等の事は一切委任せしむべし若し逆産なるか
 又は難産等の診定ありたる時は速に熟練なる産科醫を聘
 すべし此等は熟練なる産婆の直に診定し得るも産婦は心
 得置くべし
 分娩とは子宮内の胎兒が充分熟して其被包せらるゝ所の
 卵膜と稱する膜を破りて其内の羊水と膜外の胎盤等と共に
 に胎外に出る作用を云ふ此作用に尤も必要なるものは陳
 痛なり陳痛は分娩の前徴にして身二つどなるものなり此陳
 痛を感ずれば數時間にして身二つどなるものなり此陳痛

は子宮の收縮にして子宮は其内にある胎兒を娩出せんと
 して上方より前方即ち子宮底より前方に及ぼし同時に
 は間欠性にして腰の後より始まり前方に及ぼし同時に
 腹部も緊張す此の間の時は初めは長く漸々短かく且つ
 強くなりて卵膜は胎兒を包みたる儘子宮口より圓形に壓
 出され此に強き陳痛は加はる時は其勢にて尖端裂けて少
 く羊水を洩らし兒頭下て子宮口に挿入し此時は陳痛甚だ
 しく産婦は最早立つことも叶はぬ様になり陳痛の間斷な
 く頻發して兒頭子宮外に出れば陳痛は少しく減ずるもの
 なり此時産婆又は醫師は傍にありて胎兒を挽き出す此の
 如くして胎兒体外の空氣に觸れる時は初めて呱呱の聲を

發す此に續て又陳痛を發するを後陳痛と稱す此にて胎盤
 即ち後産を娩出して此にて先づ御産が済みまして御芽出
 度と祝詞を述べ升
 若し胎兒娩出後三十分以上経過するも胎盤出ることなく
 又陳痛も起らざる時は産科醫に其所置を託すべし
 分婉全く濟みたる時は産婦は此迄の疲勞と大役を了りた
 る安心にて身休精神共に疲れを覺えて漸く睡眠を催し
 來る故に十分に安静になし置くべし稀には産婦は陳痛
 の強きを忍び兼ね又は下り物を見て驚き失神するなどの
 事あれば平常より豫め其時の事を知り置き十分元氣を引
 き立て居ること肝要なり産の位置は古來よりの習慣にて

種々あるも横臥を宜しとす
 生兒に就ての臍帯の結紮及び切斷等より産浴の事は産婆
 の主たる所なれば別に必要なきも其大略を述べし
 産婦に異常なれば下敷の油紙及び汚物を取り除き布片
 に包まれ居る小兒は此時に初めて産婆の手に移りて産湯
 盥の中に入るなり此迄体内にありたるもの急に外氣に觸
 れる故に血液の循環に非常の變化を來す故に諸種の注意
 が必要にて殊よ感冒に罹らぬ様注意すべし
 産湯の温度は攝氏の三十六七度より四十度位華氏の九十
 五六度より百五度位にて手を入れて少しく温る位にて
 宜し此れ小兒は胎内にありて羊水の温度に習慣したるも

のなれば此れと同温位のものを宜しとす此温湯中に布片
 に包みたる胎兒(胎兒を布片に包むは胎兒には胎兒皮脂附
 着する爲めにすべり易きを防ぐと又手足を動かすを防ぎ
 て洗拭するに便利なるためなり)を包みて入れ只頸部より
 上を出し置き先づ別器に取りたる微温湯よて顔面を拭ひ
 殊に目に穢物の入らざる様にすべし又口内にも能く拭ひて
 後ち全身に移るべし胎兒皮脂附着する故に刺戟なき石鹼
 又は卵の白味を塗りて充分洗ふべし若し落ちざる時はオ
 レーフ油を塗りて洗ふ時は清く脱つるものなり若し一度
 にて脱らざる時は二回目三回目位にて漸々除き得るもの
 なれば別にオレーフ油は用ひざるも妨げなし又行浴時問

は五分より十分間位にて終るべし餘り長き時は害あり浴
 後は乾きたる輕き布片にて包みて濕氣を拭ひ去るべし
 産婦は身体及び精神を安靜に保つこと必要なれば親族朋
 友知己等の來訪を受けて面會し且つ雜談等をなすことは
 堅く禁すべし
 殊に初産の婦人に注意したきは産前より産科醫と懇意に
 なりて置くべし此れ平常の衛生を聞き胎兒の位置を直し
 て貰ひ出産の時は必ず傍に付き添ふて貰ふ様に頼み置く
 べし此れ通常産にても産科醫の傍にある時は安心すれば
 なり
 産時の衣服は成べく清潔なるものを選び若し汚れた

るものを着て此内に病毒附着しありたる時は分娩時に生
 じたる創面即ち胎盤の剝離面又は娩出時の裂傷等に附着
 して管に其痊癒を妨ぐるのみならず又子宮内に存せる下
 り物などを忽ち腐敗せしめ夫より強烈なる熱即ち産熱
 と稱するものを發し産婦をして危険に陥らしむることあ
 れば注意すべし
 産婦とは俗に分娩の日より七日目を云ふも此にては然ら
 ず妊娠の爲め身体所々の臓器に變化を起したるもの分娩
 後漸々變化して故の如くに復る間を云ふ
 産婦は通常分娩を終りたる後に於ては大に疲勞を感じ眠
 を催すものにして此は分娩時の疲勞を回復する爲めなれ

ば成べく安静になし置くべし一睡の後は大抵渴を訴へ飢
 を告ぐるものなれば此時は微温湯稀薄せる牛乳又は粥汁
 甘味少き砂糖糖水葛湯等を與へ決して濃厚な茶又は珈琲酒
 類等の如き血行を衝動するものは俗に血をわらすと稱す
 るものにして與ふべからず
 食料は産後一兩日は味ひ淡白にして消化し易く且つ無刺
 戟性のものを撰ぶべし粥汁若しくは肉羹汁を與へ糜粥及
 び煮沸したる麩包鳥肉鰯牛肉又は脂肪少き牛乳魚肉等を
 載せしたるもの少量鶏卵等を用ひ一週日も過ぎたる後
 平日習慣したるの食料を漸々攝取せしむべし野菜菓實等は
 三週間に用ふべし此頃に至れば腹内諸臓器も大抵舊位

置に復る故に食物を取るゑとを得且つ産後に滋養物を要
 するは天理自然なれば從來調へし如く禁食論等を行ふ時
 は宜しからず此れ飲食物の不足より乳汁分泌不足し加之
 母体の回復するゑと遅くなるものなり此に反して餘り經
 過せざる時より滋養物を過度に取りたる時は胃腸を害し
 腹痛下痢等の如き消化器病を起し延て小兒に迄及すもの
 なれば注意して適度に取るを宜しとす
 便通は産後最も注意すべきものにして分娩後三四日を
 經るも一回もなき時は醫師に下劑を乞ふて用ふべし又尿
 通は産後五六時間にして一回もなき時は護謄製の尿道カ
 テーテルを三十倍位の石炭酸水にて消毒し又其部分も同

し水よて消毒し置きてカテーテルを挿入して排尿せしむべし

悪露

悪露は子宮内にある胎盤胎児娩出と同時に子宮より剝離し娩出して此剝離したる創面より出る分泌液なり故に胎盤娩出後には何か胎内に疵の生じたるか如く感じ續いで悪露と稱する分泌液出るなり此液は其色少しづゝ異なるも始めの二三日は赤色になりて黄色を帯びたる白色即ち漿液様とすれば漸々赤色少くなりて黄色を帯びたる白色即ち漿液様と随て赤色は少くなりて黄色を帯びたる白色即ち漿液様と

なり終には膠液様となり六週間にして清潔となり殊に小兒に乳汁を與ふる時は悪露は早く止むものなり即ち三週より四週にして白色となりて遂に止むなり此時は産婦は蓐を離れるも宜し又悪露長くして日立ちしき時は能く衣服を清潔にして飲食物等に注意して日足を待つべし又腰腹部等の汚れたる部は産後微温湯にて布片を濕して拭ひ取り置くべし成るべく身体を冷ぬ様心懸くべし其他産婦殊に初産の婦人に注意し置きたるは小兒の頭の出る時陰の部に裂け傷の出るものなり此は少しの傷は免れざるものにして熱練なる産婆なれば十分保護する故に極めて少き傷にて済むものなり小き裂傷なる時は産

婦は身体を安静にして裂傷部を清潔になし置く時は癒合
 ものなり然ども睡眠中は知らずして股を擴げる等のこと
 あるものなれば兩股を揃へて膝の上の部に於て細き紐に
 て緩かに縛り置き且つ傷部は毎日二回づゝ五十倍の
 石炭酸水又は硼酸水にて清潔に拭ふべし然れども此裂傷
 深く且つ大なる時は放置する時は後に至り子宮脱出症等
 如き種々の病を起すものなれば醫師の治療を受くべし凡
 て分娩の終りたる時は直に産婦及び小兒共に醫師の診察
 を受け若し産婦に前記の如く裂傷なきの生ずる時は
 適當の治療を受け又小兒も充分に手当をなすべし
 産褥の始めにありては殊に身体を清潔にし
 産褥の始めにありては殊に身体を清潔にし

臥し居るへし此時は皮膚の機能盛にして汗の發生を催す
 ものなり殊に初めの一週間に著るしく此は回復の發顯な
 り然るに此時は感冒に罹り易き時期なれば能く注意ある
 へし即ち悪露と發汗の二作用は産婦を回復せしむる自然
 の良能なり若し産褥を離るゝこと早きに過ぐるか又は勞
 動等をなしたる時は夫れが爲め悪露及び發汗等の兩作用
 を止め産後に種々の病を惹き起すことあるものなれば此
 等に注意すべきものなり
 産褥中は身体精神共に安静になすべし尤も肝要なれば百
 事を放擲して安静になすべし傍人も又注意して感情を起
 さしめざる様になすべし殊に小兒の畸形等の時は産婦に

知らせずして醫師の治療を受けべし見舞に來る人も近親
若しくは別懇の人物にて其は面會せざるを宜しとす又
難談中感情を起すことあるか又は談話長き時は疲勞する
ものなれば注意すべし故に左に産婦來訪者の心得を述べ
産婦への來訪者は訪れたる時に無事にお出産ありて御
芽出度と祝詞を述べた後容態なきを感
を問ふ位にて去るか又は産婦談話を好む時などは別感
情を惹き起さぬ様な二三の世間話にてもし折合を見て
早く止め去るべし若し婦平常談話嫌な時は祝詞の外
は能く御養生を遊ばし一日も早く御健康に復する様祈

上開何れ又其内に御見舞に參り升位にて早く去るべし
乳熱前に述べし如く分娩の終りたる時は此に次で小兒を
養ふ所の乳汁が分泌すべきものなり此乳汁分泌は自然の
妙機にして此迄は小兒を胎内に於て養ひたる血液が今は乳
房の方に注ぎ來りて乳線に於て此を乳汁と作りて嬰兒を
養ふものにて此乳線にて作られたる乳汁は乳嚙より排泄
するなり癖婦は往々發熱することあり殊に寒熱相往來す
るを覺ふるも此は病的あらすして此迄血液にて胎兒を養
ひたるもの急に變じて乳汁に化して養ふ様になりたる故
血行に變化を起したるにして此を乳汁熱と稱す然れども
乳汁分泌の始めには必ずしも熱を起すものにあらず故に

産婦三四日目に悪寒灼熱等のある時は醫師の診察を
 受くべし此れ産熱と稱する危険なる病を起すことあり
 若し産中病に罹るときは母体を害するのみならず其乳
 汁を悪しくなし爲めに其害を小兒に及ぼすおと多ければ
 注意すべし
 衣服を着替へるは産婦の容態を見て氣分の宜き時は産
 翌日頃室を暖かくなし置きて静かに着替へる時は氣分の
 爽快よなるものなり成るべくならば午前十一時頃より
 午後一時頃迄の間を宜しとす此の頃は温暖なると室の明
 るくして万事都合宜し然れども餘り明るきに過ぎて眩し
 きは宜しからず故に適宜にすべし即ち分娩時の産室の條

に述べし如く産室の穢物を除きたるまゝにて用ふるを宜
 しとす
 産婦は木綿又はフラネルを緩く温く幾重にも巻きて腹帯
 の様になすべし
 産後三時間程経て初むるを良しとす此時は乳房も充分乳
 分後三時間程経て初むるを良しとす此時は乳房も充分乳
 十二三時間程経て初むるを良しとす此時は乳房も充分乳
 汗を満たさずして小少く且つ壓搾するも稀薄にして水様
 に白色を帯びたる液汁少く出るなり此内に黄色なる球
 形物を混す此は赤兒に向て下劑の効を奏するものなり此
 頭は小兒も能く含むこと出来ず又母親も含ましむること

食すべし赤兒に乳房を含ませしめ若し餘り赤兒のシレル
 兒に手枕をなし下膊にて赤兒の頭を胸に寄せ片手にて乳
 及び其傍を能く濕し示指と中指を乳房を押さへて
 赤兒の口に入れなれば赤兒の鼻口等を塞ぎて窒息せし
 らず夜分睡眠中乳房より此際母の鼻口等を塞ぎて窒息せし
 ひるおと往々あるものなれば能く注意すべきことなり
 初産婦は一、二日乳汁が分泌せぬとも直ちに授乳を止むべ
 からず能く分泌する様に注意すべし
 乳房の用意は前に述べたる所なれば茲に略す
 又産後の爲め立悪し熱な所あるか乳嘴を痛めたるか又他
 の病の爲め醫師に授乳を禁せられたるか或は不幸にして

拙にして漸々少しづゝ慣らさしめ若し餘り赤兒のシレル
 時は牛乳を稀薄にして與へ少く含め様になるものなり又
 の如くすれば自然に慣れて能く含め様になるものなり又
 古來より赤兒には五香湯などを與へて胎毒を去ると稱す
 るも此は別に用ひるに及ばず凡て産婦は分娩後七八時間
 乃至十二時間位にして初めは稀薄なる乳汁分泌し此内に
 は乳球と稱する帯黄白色なる球形物を含む此は下劑の効
 を有ち胎兒便にかばいと稱して胎内にあり且つ滋養物を取
 掃する作用を保つ故に適當に便通もあり且つ滋養物を取るべ
 ものなり故に小兒に授乳する時婦は充分に養物を取るべ
 し即ち第四日頃より漸々淡味にして消化し易き滋養物を

小兒を失ひたるか等に
に悪寒發熱頭痛等
法を行ふか又は温湯にて
柔げ置くべし此にても治せざる時は乳房に氷囊を貼する故に
摩婦は用事少きも傍人は程よく談話等をなすも宜し又考
然なるものはなれば人報の少し位は宜し故に讀ます考
へ事等は悪し動かすも七夜位は宜し故に讀ます考
の如きは情を動かすも七夜位は宜し故に讀ます考
へす居る方宜し又室内の掃除なすべし位は宜し故に讀ます考
り位起る居る方宜し又室内の掃除なすべし位は宜し故に讀ます考
漸々平常の業に移る様になすべし

以上述べし如く産期とは妊娠及び分娩に由りて變化した
る身体諸機關の舊に復する迄の間を云ふ即ち擴張したる
子宮は收縮弛緩したる腹皮は縮み乳汁を分泌せしむる
等一變期なれば其の攝生法も緊要なるものに於て此
を一括して言へば身軀精神共に安んじ保ち滋養物を適
に食し身体及び衣服は凡て清潔になし感情を起さぬ様
懸くべし若し此病を發し治る時は種々の生殖器病即
ち子宮諸病全病等を發し治る時は種々の生殖器病即
なれば此攝生法を守ると必要なり

健康なる初生児の状態

健康なる初生児は身の丈け五十仙迷(一尺六寸四分)にして
女児は此より二仙迷位短かく頭圍は男児三十五仙迷(一尺
一寸五分)女児は三十四仙迷(一尺一寸)にして身の長の増育
は重量の増加より速きものなり即ち体重は男児は三千三
百瓦女児は二千九百瓦を保ち最初の三四日は毎日百二十
瓦より二百二十瓦位宛減するものなり然れども母乳又は
乳母にて養育する小児は十日位經過すれば初めの重量に
復るものなるも人工營養即ち牛乳煉乳粉等にて養育す
る小児は体重の減することども乳養する小児より多く又初

めの重量に復するにも此より長き日數を要するものなり
 左にヘーネル氏の表を掲げて生兒体重増加の各月に於け
 る一斑を示す

五十八

月次	ル月ニ於ケ	ル日ニ於ケ
初最	3100	同
月一	3835	24.5
月二	4930	36.5
月三	5545	20.3
月四	6010	15.6
月五	6680	22.3
月六	7005	10.8
月七	7680	22.5
月八	8100	14.0
月九	8370	9.0
月十	8680	10.3
月一十	9170	16.3
月二十	9470	10.0

右に述べし如く最初一ヶ月は七百三十五瓦第二ヶ月には
 一千〇九十五瓦第三ヶ月には六百十五瓦第四ヶ月には四

百六十瓦第五ヶ月には六百七十瓦第六ヶ月には三百三十
 五瓦第七ヶ月には六百七十五瓦第八ヶ月には四百二十瓦
 第九ヶ月には三百瓦増加すること最も多く夫より漸々増加の度を減じ第五ヶ
 月と七ヶ月とは割合に多く増加す此の如く重量は増加
 しつゝあるものにて外見は帯紅蒼白色にして胎兒脂と稱
 する白色なる脂肪の如き汚物にて被はれ特に兩股の間腋
 窩等の如き皺襞のある部は多し頭部の大小顔門(ヒヨメキ)
 は少しく開き頭髪は暗黒色にして長さ一仙迷より三仙位
 あり眼球は光澤あり眉毛睫毛共に鮮かにして終日睡眠
 居りて飢ゆれば醒めて乳を求め飽けば又睡眠りて此間に

五十九

時々大小便の通痢あり
 生後二三日になれば乳を求むる度數多く寤寐の時間稍々
 長く且つ日を経るに隨つて睡眠すること少くなるものなり
 大便は分娩後十二時間位にして通ずるものにして初めの
 二三次は黒色粘稠なる胎兒便(蟹ばい)と稱する胎内に
 間腸中に貯留りたるものなり第四日位よりは普通の黄色
 糜粥狀にして恰も卵黄の小しく凝固したる如きものを排
 泄す
 尿初生兒は一日間に凡そ七八回なるも日數を経るに隨ひ
 て十五六回より二十回位あるものなり
 早産兒の状態妊娠二百八十日に至らずして分娩したるも

のを早産兒と云ひ稀には二百二十日位にて生れ成育する
 ものがあるも大抵は二百五十日以上に至らざれば成育する
 胎毛あり脂肪層少く皮膚蒼白色にして皺あり一見虚弱
 なる状態をあらはし又妊娠二百八十日又は其より以上の
 日數を経るも充分に發育せずして早産兒の状態をなすこ
 とあり又小兒の消化器の障害なきも急に母乳を離したる
 時は五日位にして体重減することあるも五日後に至れば
 回復するものなり殊に牛乳山羊乳等は回復早きも煉乳肉
 羹汁及び種々の麥を煎出したるもの又は粉等は回復遅し
 臍帶脱落第五日頃より七日頃迄に脱落するものにして其

瘡痕は十日より十四五日位にて治す又臍帯太くして肉塊
 状をなすものは脱落すること遅く此の如きは胎内にある
 こと久しきに過ぎたるものに多く又臍帯の脱落したる瘡
 痕より悪臭の膿を生ずる時は時々細帯を交換して清潔に
 なすべし

初生児の脈搏及び呼吸脈搏は一分間百五十至より百二十至
 にして呼吸は一分間四十四五回より五十回なり
 赤児は出産後二三日にて黄疸病と稱して黄色になるあど
 あるも別に心配する程のこととはなきものなり
 赤児の身体の發育は唯に体重と消化器のみに關するもの
 にあらず同時に筋肉并に骨格も益々堅實なるを要するもの

のにして健康なる赤児は第二ヶ月の終り第三ヶ月頃に至
 れば頭首を静定し得るものにして且つ頭首を擡げて明所
 に向はんとするの状をなし第五ヶ月より七ヶ月頃になれ
 ば笑蹠をなし十二ヶ月より十五ヶ月に至れば立歩し第七
 八ヶ月に至れば門齒生へ始め十ヶ月より十二ヶ月に至れ
 ば前齒悉皆完備するものなり若し普通より肥満したる赤
 児にして前に述べし通規に違ふこと甚しき時は疾病なる
 ことあれば速に醫師の診察を受けて治療を求むべし

精神の發達は一樣ならざれども一般の習慣として赤児を
 愛弄して高聲を發せしめたり喜笑せしむるを以て無上の
 快樂となすものなれども宜しからず又睡眠を妨ぐる等も

宜しからず此等の事は精神を發達せしめずして却て幼稚にして軟弱なる腦髓を刺戟して疲勞を來し發達を妨げるの害あるものなれば能く謹むべし凡て赤兒には諸般の騷擾なる精神感動は避くるを宜しとす又授乳後入浴後等は更らに安靜になすべし若幼稚なる時より軟弱なる腦髓を刺戟する時は成長の後精神遲鈍となり又は神經過敏となり腦髓の使役に堪へざるものなり

衣服

衣服は唯々寒暑を防ぐを度となし暑くなく寒くなきを宜しとす木綿又はフラネル等を宜しとす又成べく土地の風

習に慣ひて加之に簡單なるを撰べし吾國にては赤兒に澤山に美服を著飾らせるを以て外見の様に心得てか暑中なむにても幾重も着重ねて其上へ幾筋もの紐を締め其れが爲め赤兒は手足等の運動を妨げられ發育上に害をなし且つ赤兒の皮膚を薄弱になすものなれば能く注意して適宜に着せしむべし殊に直接に皮膚に觸れる所の襯着襪襟等には數々洗濯したる亞麻布木綿布等の輕軟簡便にして縫際又は皺襞なむのなきものを數多く調へ置き度々交換して用ふべし凡て衣服は柔軟にして寛緩なるものを撰び又帯紐等は成べく少くして緩く結び胸腹等を壓迫して爲めに呼吸作用及び胸圍の發育血行等を妨げて貴要の器臟を

害さるる様注意すべし
頭巾は毛糸編等宜しく暖かき室内にては用ふべからず
外出の時のみ用ふべし頭部は毛髪よて適宜に保つ様に造
物者より作られたるものなれば餘り暖かに保ち過る時は
虚弱となり種々の病を起すものなり
足袋は毛糸編又は毛織物にて作りたるものを用ふべし又
當時流行する衛生腹掛と稱して胸掛と臀部のなき股引と
接續きたるものを毛織物等にて作りて用ふる時は胸腹等
より足まで温かに包まれて便利なり殊に夜中就寝時に用
ひる時は寝冷を防ぐことを得て宜し若し大小便にて身体又
は衣服等を汚したる時は晝夜に關せず直に清潔なる乾き

たる布片にて拭ひ衣服を交換すべし又臥床の汚れたる時
も直に交換すべし
月代古來よりの習慣にて生後一週間にして初毛を剃り落
すものなれども此は宜しからず赤兒の頭部は骨も皮膚も
柔軟にして僅かに毛髪等の補助に由て保護し得るものな
れば剃り落す時は頭部の保護を欠くものなり若し習慣故
剃り落さねばならぬとならば生後一年も経て赤兒の頭部
の骨並に皮膚の少し堅くなりたる時になすべし又赤兒
の初毛を剃り落さる時は赤毛になり且つ毛髪稀薄くし
て短かくなると云ふ人あるも我日本人の頭髪は決して西洋
人の如く赤毛にはならざるなり

赤兒の臥床 は空気が流通の良き所にて乾燥したる自己の臥
 蓐を與へ餘り寒き時は初生兒には湯温器を入れるべし三ヶ
 月以上も経ては初め臥蓐を能く温め置き少く入れて
 時は湯温器又は案火等は必ず出すべし頭は少く高くし
 口鼻等を蓐布よて被はざる様注意すべし又母親乳母等と
 同蓐中に臥せしむべからず此臥蓐中の空気を不潔にな
 らしむると母親又は乳母等の睡眠中乳房上肢又は蓐布に
 て口鼻等を壓迫被覆するも赤兒は此を防ぐの力なくして
 窒息し死すること往々あるものなれば注意すべし
赤兒の居室 は家中最も開闔静にして空気の流通良
 日光の射入する室を撰ぶべし且つ暖爐を設けて温暖なら

しめ易くなし置き若し日光射入して明朝に過ぐる時は木
 綿布又はカンレーシヤ等の幕を張りて日光の射入を避く
 べし又分焼後一週間位は攝氏二十度内外の温度を有する
 室内となし春夏の如き温和なる季節には十日より二週間
 秋冬の如き季節には五十日より六十日を撰びて初めて外
 氣に觸れしむべし成るべく温和なる日を撰びて日に數回
 五分より十分位宛外出をなし漸々時間を長くし度數も増
 べし
 室内は密閉て置く時は空気が不潔となり身体に害あるもの
 なれば不潔なる空気を室外に出して同時に新鮮なる空気を
 室内に導き入れる必要なり此を空気が交換(換氣法)と

云ふ空気の不潔となりたるを知るには新鮮なる空气中に
十五分位呼吸し居りて後其室に入る若し空気不潔となりた
る時は一種云ふべからざる悪臭を放ち且つ此室内に長くた
居る時は頭痛眩暈嘔気等を發す此時は直に窓戸を開け放
ちて新鮮なる空気を入れ方よりは不潔空気を出すべし
不潔空気は新鮮なる空気に下より入るものなり
又冬等は成り出で新鮮なる空気を下より入るものなり
此所より入れることを得れば尙ほ宜し若し隣室ありて
窓外に毛布等を掛けて風勢を柔軟となし隣室なき時は
も朝夕二回は此法を行ふて空気を入れ換ゆべ此の時注意

すべきは窓戸を少し開く時は風勢強くして害あるものな
れば窓戸は充分に開き十分より十五分位にて又窓戸を閉
づべし如何に換氣法を嚴に行ふも室内に不潔物ある時は
空気が直に不潔になるものなれば便器汚れたる糞等
決して室内に置くべからず又臥床等は塵埃の竄入するも
の中又晒すべし
室内を暖むる爲めに火鉢を入れる時は必ず他所にて發し
たる火を取るべし決して居室にて火を起すべからず木炭
へ火の移る時は炭酸を多く出す故に空気を不潔となすの
害あり且つ居室にて襦袢又は他の品物を乾燥かし又は香

氣ある花卉等を備へ置く時は空気を不潔になすものなれ
ば害あり宮詣古來よりの習慣にて生後三十日又は其以上にして氏
神へ參詣することあり秋冬等の季節に生れたる赤兒を三
十日位經て屋外の風暴らき所に連れ出し又は夫れが爲め
に衣服を着替へさす等にて感冒に罹り且つ車上に於て動
搖する等にて病を惹き起し思はざる不幸に陥るおどあれ
ば此等の風習は止むるを宜しとす若し古來よりの習慣に
て止むること能はずとならば日を延ばして春暖の季節と
なし赤兒を外氣に觸れ又は車のの上にて動搖するも差支へ
なき程發育したる後に行ふべし

赤兒啼泣くどて亂りに動揺したり乳を哺ましむべからず
赤兒は凡て習慣の就き易きものにて初めの三四日は最も大
どもなり啼兒どもなるものなれば初めの一週間は一時間
切にして授乳の時間も大凡時を定め初めの一週間は一時間
半より二時間位隔て與ふべし右の如く授乳の時間を定め
て授乳し時の至らざるに啼く時は襁褓の汚れたる爲めに
不快を感じずるか衣服に針又は他の物の刺すか虫にて
も喰ふか腹痛にてもあるか等を注意して襁褓を換へるも
未だ啼の止まぬ時は腹痛又は衣服を調へて着替へさせ夫にて未だ
劇しく啼く時は腹は痛か又は他の苦痛あるものと見做し醫師
に診察を乞ふて治療を求むべし

其^{その他}少し位^位啼^啼くとて乳^乳を哺^哺ませたり動^動揺^揺たりするは宜^宜し
 其^其からず其^其れが習^習慣^慣となりて晝^晝夜^夜の別^別ちなく動^動揺^揺らざれば
 啼^啼き又^又寝^寝に就^就くにも動^動揺^揺らざれば眠^眠ひらすと言^言ふ様^様にな
 り母^母親^親と保^保姆^姆とは實^實に困^困難^難するものなれば能^能く注^注意^意して
 初^初めの仕^仕附^附方^方を誤^誤らざる様^様になすべし赤^赤兒^兒の少^少し位^位啼^啼く
 は大^大人^人の談^談話^話をなす替^替り得心^{得心}得^得放^放置^置すれば自^自然^然に眠^眠むる
 ものなり且^且つ少^少し位^位啼^啼く血液^{血液}の循^循環^環を盛^盛よするものな
 れば放^放置^置するを宜^宜とす
 入^入浴^浴は亂^亂りに用^用ひずして適^適度^度を行^行ふ時^時は赤^赤兒^兒の成^成長^長を補^補
 け非^非常^常に効^効あり初^初めは毎^毎日^日一^一回^回宛^宛入^入浴^浴せしめ其^其他^他夏^夏時^時は補^補
 時^時々^々微^微温^温湯^湯にて清^清く拭^拭ふべし成^成長^長の後^後は毎^毎日^日又^又は隔^隔日^日に

入^入浴^浴せしむべし若^若し此^此より多^多く行^行ふ時^時は害^害あり又^又浴^浴湯^湯餘^餘
 り熱^熱に過^過ぐる時^時は害^害あり(牙^牙關^關緊^緊急^急等^等を起^起すことあれば攝^攝
 氏^氏の三^三十^十八^八度^度より四^四十^十度^度位^位のもの宜^宜しとす必^必ず指^指尖^尖に
 て温^温度^度を檢^檢することなく檢^檢温^温器^器を用^用ふべし赤^赤兒^兒を入^入浴^浴せ
 しむるには必^必ず先^先づ浴^浴後^後に着^着せる衣^衣服^服及^及び其^其他^他の物^物を調^調
 へ置^置べし
 赤^赤兒^兒の身^身体^体を洗^洗ふには軟^軟き布^布片^片を清^清潔^潔なる温^温水^水に浸^浸して
 先^先づ眼^眼を拭^拭ひ後^後刺^刺戟^戟なき石^石鹼^鹼又^又は卵^卵の白^白味^味等^等を塗^塗布^布し置^置
 きて軟^軟かき布^布片^片にて洗^洗ふべし決^決して身^身体^体を洗^洗ひたる後^後其^其
 水^水にて眼^眼を洗^洗ふべからず若^若し不^不潔^潔物^物眼^眼の中^中に入^入る時^時は救^救
 ふべからざる眼^眼病^病となり明^明を失^失ふに至^至ることあれば注^注意^意

すべし
 頭髪も常に清潔に保持すべし若し頭瘡等を發生する時は
 先づ油を塗布し瘡痕の軟化する時此を除去りて其痕跡へ
 は醫師より薬を乞ふて塗るべし
 浴後は身体を拭ふに温めたる布を以て次に軟かなるフ
 ラチルにて全身を軽く摩擦し冷かなる清水に浸したる布
 片にて口中を拭ふべし
 入浴後直ぐに冷風に觸れしむべからず暫時は温かに保つ
 べし然らざる時は感冒に罹るものなり又哺乳後直に入浴
 せしむべからず必ず半時間以上を經て入浴せしむべし又
 入浴は五分より十分間位を良とす

歯牙發生小兒は生後二十週より二十八週位にて下顎中央
 の前歯二枚を生じ上顎の四枚は三十六週より四十週の間
 に生ず第一白歯四枚は十二ヶ月より十五ヶ月の間に生ず
 犬歯四枚は十八ヶ月より二十四ヶ月の間に生ず第二白歯
 四枚は三十ヶ月より三十六ヶ月の間に生ず此等は乳歯と
 稱へて五年より七年の間第三白歯を生ずると同時に乳
 歯は中央の門歯より初まりて脱落して順次に交換し三十
 枚の不換歯を生ず又智慧齒四枚ありて二十歳以上に至り
 て始めて生じ遂に三十二枚の歯牙完備するものなり

小兒乳養の事

世の中に生れし生けるものにて子を産みたる以上は皆此
 を養ひ育つる義務あるものなれば増して万物の靈たる人
 に於ては養ひざるべからず只義務あるのみならずして母
 親の身軀に對しても乳房を吸啜する刺戟に由りて子宮の收
 縮を速め且つ子宮出血等を防ぐの効あり又小兒に向ては
 天與の配劑にして生れ出てより發育するに隨て其濃稠の
 度を増して適度となすものなれば此に増さる滋養品なく
 故に發育すること速にして消化器病即ち胃腸病呼吸器病
 等に罹ること少なし
 乳汁は通常は月經となる所の血液が妊娠中は胎内の小兒
 を養ひ分娩の後には帶青白色なる乳汁に變化して小兒を養

ふに適當なる稠度となりたるものなれば乳汁は母親の血
 液の變化したるものなり乳汁の性質はアルカリ性の反應
 又は中性にして赤兒の胃腸にて能く消化して血液に變じ
 赤兒の身體を養ふものなり温度は人の体温と同温にして
 中には牛酪質乾燥質砂糖水鹽類を含み顯微鏡にて檢する
 に小き球形物多く此に脂肪球が薄き膜に包まれたるもの
 にして之を乳球又は牛酪球と云ふ乳汁の青白色に見ゆる
 は此球形物が水中に夥多ある爲なり乾酪質牛酪質等は主
 に筋肉及び血液の主成分を作り乳汁は甘き味を附けて後
 乳汁は前に述べし如く之を分泌する者の血液の變化した

るものなれば若し分泌する母親又は乳母に精神の變常(心)配あるか身に變異ある時は又飲食物等の變りたる時は乳汁の變化するものにして小兒に害あるものなれば左に乳を授くる母親又は乳母の守るべき衛生の大略を述べ飲料は一度煮沸したる清水を良しとす又砂糖水牛乳稀き茶珈琲チョコラデ等は宜し酒類は例麥酒葡萄酒及りども用ひざるを良しとす又乳を哺ませたる後急に口中及び咽の喉の渴きを覺ふることあり此は体内の水分乳汁となりて出たる爲めに体内の水分の減じたる時なれば前に述べたる飲料を用ひて渴を癒すべし

て用ひるは宜しからず米飯麥飯等に魚肉鳥獸肉野菜麥麵飽等の如きものを取り交て用ふべし穀物へ野菜を取り交て用ふべし小兒を養する間は規則正しき業務を取ることなく常に慣れたる家事の容易なものと赤兒のこどをなし決して憂愁悲哀驚愕喜悅等の如き精神を刺戟し又は勞するこどなく適宜の運動をなし且つ寒暑を厭ひて病に罹らざる様注意し若し食物進まず腹痛下痢又は便の色及び尿の色などの変りたるか心季亢進あるか手及び下肢に麻痺又は水腫ある時は醫師の診察を乞ふて所置を求むべし

小兒乳を授

初めて乳に附けるは分婉後母子共に一睡して精神爽快となりて小兒の飢を訴ふる時は「マクリ」砂糖水等を飲ませる
ことなく乳を授くべし此も母乳の未だ分泌せざるも小兒
順しき時は放置するも良ければ授くべし此の飢を訴へて啼く
時は牛乳を稀釋して授乳せよ此小兒含乳に慣れると母親の乳腺
の乳を合哺しむべし此小兒分泌を促すの効あり且つ初
の機能盛ならしめて乳汁の分泌を促すの効あり且つ初
めて分泌する乳汁は帯黄白色にして乳球と稱する脂肪の
如きもの多く此は小兒の胎内に貯蓄りたる腹内の
惡物を掃ふ下劑の効を保つものなれば決して放棄てはな

らぬものなり
小兒に乳を與ふるには産褥中に述べたれども大畧を述べ
べし即ち母子共に半臥の位置を取り稍々頭首を擡げて母
親の左手に小兒の頸を抱きて頭を近づけ右手の中指と中指
の間を乳嘴を挟みて合哺せしむべし
小兒乳を飲み了りたる時は毎回必ず軟かさ布片を清水に
浸して口内を拭ひ又同じ様なる布片にて乳房は授乳の前
後共に拭ふべし
小兒を乳養すべき時期は一定せざれども短かくも第一齒
の發生する迄にして此迄は乳汁の外他物を與ふべからず
通例滿一ケ年位迄與ふるを良とす然れども滿一ケ年經る

ども他に事情なき限りは漸々に食物に慣れしめ初めは一
 二回づゝ減じて次に朝夕と一回位となし夫より朝夕丈
 けとして終に離す様になすべし又離乳の時期來りたるも
 夏の季節には炎熱甚しき時は小兒は胃腸等の病に罹り易
 く動もすれば嘔吐下痢腹痛等を起し易きものなれば此
 時期には乳を離ざるを宜しとす又授乳中小兒の發育割合
 に少きか又は哺乳時に小兒煩擾する時は乳汁不足なる徴
 なれば牛乳を月數に應じて稀釋して與ふべし(牛乳稀釋の
 度は後の牛乳養育法に記す)
 徐々に乳を離さんとする時は母親は飲料を節減すべし若し
 急に乳を離さんとする時は飲料を節減するの外成べく淡

白なる食物を少量に取り緩性の下劑を服み又は灌腸法を
 行ひて便通を促し乳房は綿帯にて擧げ置き若し惡寒發熱
 等ありて乳房硬結する時は醫師の診察を乞ふて治療を受
 くべし

乳房の保護

乳房の保護(殊に初産婦)は皮膚柔軟搔抓又は輝裂を生
 ずること多く特に産後の惡露の附着きたる手指にて觸れ
 又は搔抓するに由て炎症を起し危險に陥ることあり又乳
 房炎にて發熱したるを感冒の爲めに發熱せるものと見做
 し放置する時は危險に陥るものなれば醫師の治療を求む
 べし
 乳房に創傷又ハ輝裂を生じたる時は創の大小に關はらず

所置を加ふべし乳房の創傷は乳汁の分泌すると赤兒の含
 哺とにて其部を浸潤する爲めに治し難きものなれば若し
 創傷燻裂等の生じたる時は五十倍の石炭酸水又は三十倍
 の硼酸水にて洗滌し「ガーゼ」を當て其上を脱脂綿にて被ひ
 て細帯をなし置くべし若し細帯を交換する時は「ガーゼ」を
 去るに微温湯にて濡し徐かに去るべし此れ「ガーゼ」は創面
 に固着し居るものなれば除去する爲に傷所を大きくするもの
 なればなり又乳房腫起して炎症を起したる時は硼酸水又
 は石炭酸水にて浸したる「ガーゼ」を當て其上を細帯し置き
 て醫治を求むべし

母乳を與へざる場合并に與ふるも中途にて斷乳すべき場合

- (1) 乳汁分泌の量少き時例へば身体は肥滿するも乳汁の分
 泌少か又ハ分泌せざる時なり又初産の時は分泌せざる
 も次回の産よりは良くなる乳汁を夥多く分泌すること
 あるものなれば必ず授乳を試むべし
- (2) 乳嘴少なるか創傷等の或る時なり此時は乳頭を用ひて
 哺吸せしむるもよし
- (3) 生母再び妊娠する時又は生母虛弱にして著しき貧血症
 又は全身病心臓病腎臓病血友病等に罹るか又は肺勞梅毒
 毒痛瘋骨病等あるか或は熱性傳染病腸チブス産褥熱丹
 毒等に罹りたる時は止むべし
- (4) 生母癩癰症鬱憂病癩胸へステリー等に罹りたる時

(5) 生母一定の職業ある爲めに規則正しく授乳し能はざる
か又は小児の口唇鼻等の時形の爲め哺乳し能はざる時
等なり

右の如き場合には母の乳を與ふるおと能はざれば據なく
此に代用するものを撰ぶべし母乳に次で可良なるは生母
と年齢并に娩産の時の大差なき遺傳及び他の病なき強壯
なる乳汁の分泌の充分なる乳母を雇ふて乳養せしむるを
良しとす
乳母を雇ふには豫め醫師の診察を請ふて性質虛弱遺傳病
傳染病の有無生子の有無若し生兒ある時は其體質を檢し
て健康なるや否を判定し且つ口内及び腋窩の悪臭を放つ

ことなく品行方正にして温和に乳母の生兒と乳養せんと
する赤兒との分娩期と大差なく大抵三週間より八週間位
前後して分娩したるものなれば又乳母は從前二人以
上の小兒を乳養したるも皆善良なる結果を得しものなれ
ば大抵乳汁は良性に於て養分に富むおとを推し知るごと
を得るなり成べくなれば雇入れの時三週間前に分娩した
るものなれば尤も良し此れ乳量の減少すること少く産後
の諸病も大抵治して創傷も治療すればなり
乳母は年齢二十歳以上三十四五歳迄にして容貌態度共に
整然として面色爽快に頬肉帯紅白色に口唇輝裂なく齒
鮮紅色強實にして容易に出血せず且つ齒病なく呼出氣に

悪臭なく乳房は堅實にして大き過ぎず乳嘴短かく乳房を
 壓すれば授乳後と雖も數條の腺より放出し授乳後二時間を
 を経過すれば又咽喉の癒痕を良好し鼻の低平さか又は癒
 痕あるか又は咽喉の癒痕を良好し鼻の低平さか又は癒
 なすもの等は病あるの徴なれば此等の如きものは雇ひ入
 れざる様にすべし又清潔好にて温順しく虚言を言はず
 小兒を大切にす者宜しとす
 新鮮なる人乳は味ひ甘くして青白色なるか及ば純白色
 にして流動し臭氣なく少く水を滴すれば雲の如く朦朧と
 して散り沈むことなく又暫く静定する時は此中に酸味
 の凝塊若くは細片を生ず此者は乾酪なれども牛乳の如く

大塊をなさず乳汁は精神發揚したる時過勞後又は久しく
 授乳して養分の不給等は乳汁の性質を變じ且つ滋養少
 く又は服薬後酒類飲用後等に此等の物質を分泌す又月經
 時には乳汁中の脂肪乾酪質等を増す故に小兒に害あり然
 れども月經止めば授乳すべし又發熱時も乳汁の性質を變
 ずる故に害あり
 乳母を雇ひ入るゝには以上の如き資格を有するものを撰
 ぶは親たるものゝ愛兒に對する義務なれば能く注意して
 撰ぶ事肝要なり又孤兒等の時々腸胃病に罹り遂に衰弱し
 て斃るゝもの多き以上述べし注意の届かざるに由るこ
 と多し

乳母は夜間決して小兒と臥床を共にすべからず又授乳中
なりとも臥床中に入るべからず此れ臥床の中の空気を不
潔になすものなればなり
乳母の飲食物は母親の授乳中に述べしと大概同じなれど
も都會に住居する人田舎より雇ひ入れたる時は此迄粗食
に慣れたるもの急に美食に移りたる爲に消化器は異常を
起し腹痛下痢等を發し乳汁の性質を變ずることあれば注
意して漸々に都會の食物に移らしむべし又是迄勞働をな
したるものは矢張り急に變らざる様權其他の物を洗濯
せしむる等なさしむべし即ち田舎より雇ひ入れたると都
會より雇ひ入れたるとは其心して取扱ふべし又飲料は牛

乳母は小兒の乳母に預けたるどて放棄すべからず常に注
意して其乳汁の分泌は良きか性質は温順きか小兒の發育
は能きか小兒を扱ふには自分の教へたる如きや夜中の臥
に對して親切なるや否授乳時間は規則正しきや否等に
床の如何になすや乳母自身は身體を清潔になすや否等に
充分注意して若し不充なる時は改めさする様に注意し
若し改めずして到底不適當と認むるか又は小兒の發育惡
しきか乳汁分泌の少き時は取り替へて適當のものゝ履ひ

九十四
入れる様になすべし故に初めの一週間は殊に注意を要す
るなり乳汁の分泌を檢するには小兒哺乳の際安靜にして
別に煩躁することなく嚙下には急がはしき態をなし且つ二
十分より三十分位にして飽満して乳房を離すは乳汁の分
泌充分なる徴なり又小兒の發育如何を檢するには時々小
兒を秤量るを宜しとす此の如くして小兒の体量二週間も
増加せざるか又は多少の増減あるは營養不足なるの徴な
り
乳母は凡て己の家事及び小兒の事等を心に懸けぬ者を雇
ふべし餘り己の家は如何に小兒は如何になど心配する時
は自然と哺乳兒の扱不親切になり且つ乳汁の性質を變ず

ることあるものなれば此等の事も能く注意し餘り貧にし
て小兒の寒き様なる時は少しづつ着古るしたる小兒の衣
服にても與ふる様になすべし

人工營養法

小兒を養ふに最も良きは人乳にして若し人乳なき時に此
に最も性質の近きものに他物を混じて人乳の性質となし
て用ふべし人乳に最も近きは驢馬乳山羊乳牛乳煉乳(コン
デンスミルク)等にして我國にては最も多くありて需用も
多く且つ研究も届きたるは牛乳なり故に牛乳の養法を述
ぶべし

牛乳は人乳に比すれば其色白く不透明の度も強し此れ牛乳中には人乳に比すれば乾酪質は二倍脂肪は同量糖分は稍々少く鹽類は三倍あり故に小兒に與ふるには適宜に稀釋すべし此を二倍に稀釋すれば乾酪質は同量糖分は脂肪と糖分量少く故に牛乳稀釋の度は少兒の分娩後の日數と發育の度に從つて小兒の胃腸に堪へ得る様稀釋するも漸々發育して胃腸の働き強くなるよし從つて濃厚の凝固物ある時は乳汁の濃厚に過ぐ

の徴なり乳汁濃厚に過ぐる時は胃腸を害し嘔乳便秘等を起し後腹痛下痢等を發するとあり初生兒初め一週間は四倍即ち牛乳一合へ水三合石灰水一食匙白糖二食匙を混て煮沸し清潔なる硝子瓶に入れて冷水の中に浸し置き授乳時は人体の温度と同温に暖め入れて洗ひ置きたり二時間隔てせしむべし又夜中は初めは五分より二十分とし入りて哺乳せしむべし又夜中は初めは五分より二十分とし二時間隔てせしむべし又夜中は初めは五分より二十分としよ三時頃を隔て一度と翌朝與へる位になり二週間も経てば三時頃の止める様漸々慣れしめて夜中は與へざる様にすべし右の如き法にて稀釋し且つ授乳し漸々成長するに従つて濃厚となし六ヶ月以上に至れば小兒發育の度に從つて

胃腸の充分消化する力を有つ時は純粹の牛乳となすも良
 し又三ヶ月以上に至れば稀釋するに燕麥燕麥粉小麦粉大
 麥米等の稀釋なる煮汁を用ふるもよし決して三ヶ月以
 には用ふべからず此の稀釋したる牛乳にて養育する小兒
 は下痢發熱等のある時は速に醫師の診察を受くべし
 過量の牛乳を與ふるの害生母及び善良なる乳母にて養育す
 る時は十三四ヶ月にして立歩し得るものなれども稀釋牛
 乳にて養育する小兒は能く發育して肥滿するものなれど
 も皮膚薄弱にして手足細く腹は膨滿して一年以上經過す
 るも立歩し得ざる時は濃厚なる牛乳を過量に與へたる害
 にして尙復病俗にセムシの初期なることあれば注意して

一年未滿の小兒には一日八合より多く與ふべからず此に
 て小兒饑を訴ふる時は燕麥大麥小麦等の粉又は煮汁とな
 し砂糖を混て與へ又は乳粉等の煮汁を與ふべし
 コンデンスミルク(煉乳)は牛乳を煎煮して水分を除き多量
 の砂糖を加へて製したるものにして砂糖は牛乳五合五勺
 に六十五勺の割合に加へたるものにして砂糖は牛乳中
 砂糖なり人乳は百分中四分半の糖分を含む而して煉乳は
 蜂蜜の如き稠度にて罐を開くも多量に敗せざるものを良
 とす罐を開きたる時は上面には砂糖の結晶と乳汁の乾燥
 したるものより成る膜を蒙り此を剝離する時は内部の乾燥
 汁には小しも異常なきものを良とす又罐を開くに中央に

封蝋のなき方を開くべし又蝋の表面及び周囲に凝固し又は
 は變色したる者ある時は除き去るべし決して此を小兒に
 與ふべからず煉乳は此を匙にて掬ひ他器に移す時は明き
 所にて透かし見て顆粒ある時は製し法の粗悪なる徴なれ
 ば與ふべからず又精良なる煉乳は四倍の水に溶解して滓査
 を殘さず煉乳は牛乳を得難き地方にては小兒を養ふには生牛
 乳を良とす是れ煉乳は牛乳と砂糖と大概五分五分に入り
 たるものにして營養分不充分なるが故に筋骨の發育充分
 ならず爲めに小兒は虚弱にして動もすれば病に罹り易し
 故に牛乳を得るゝと能はざる地方にては鶏肉鳩肉等の肉

養汁等を加へて稀釋すべし

人工營養品

人工營養品とは人乳牛乳山羊乳等の外人工にて製したる
 ものにして此等は主に澱粉質に砂糖を混じて作りたるも
 のにして左に大略を述べ
 吾國にては古來人工營養品には乳粉糜粥汁大麥燕麥等の
 粉を煮るか又は煎汁にして此に砂糖を混じて製したるも
 のなれば澱粉質にて乳汁中の牛酪乾酪質の如く筋肉等を
 發育せしむる性質はなく且つ生れて二ヶ月位は睡液の分
 泌少く加之に睡液中に澱粉質を消化する性質の物を欠く

故小兒は消化障害を起し營養不良にして死亡すること多
 きものなれば母乳なく又乳母を得ると能はず且つ不便な
 る地方に牛乳馬乳山羊乳等もなく又煉乳もなくして
 方法の盡きたる時のみ興ふるものに決して好んで用
 ふべからず然れども小兒三ヶ月以後に至りて營養發育共
 に宜しき時は牛乳又は煉乳を稀釋するに右の粉質の
 汁に濃くなすも良し此は始めの極めて稀釋となし漸々小
 宛の濃厚なすべし然れども如何に濃粉質を多くするも牛
 乳の十分一より多し然れども如何に濃粉質を多くするも牛
 吾國に古來より多種々の營養品あり心と碎きて西洋にても種々
 の營養品ありてより多種々の營養品あり心と碎きて西洋にても種々

當今にてチステル氏の乳粉漸く聲價を得たるが如く此は
 黄色なる甘き粉末にしたるものにして此は六倍より十倍位
 炊きて粉末となしたるものにして此は六倍より十倍位の
 水にて煮沸して用ふるものにして此は初より用ふべきも
 のならず乳離れ頃より少し宛用ひるは宜し前に述べし凡
 ての人工營養品は何れも三ヶ月以前に用ふべからずチス
 テル氏の粉の如く澱粉の外に牛乳卵黄等を含むものも
 初の養育には適せざるものなれば況して本邦在來の澱粉
 質のものには小兒の養育に適せざるものなれば言ふまでもなきことな
 れば必ず萬止むを得ざる時分は以上述べし小兒養育法と
 小兒養育の大任を負ふ貴婦方は以上述べし小兒養育法と

繰り返へし小兒を養育するには母親の乳に勝るものな
 く次は相當なる乳母にて若し此二つを得ざる時は生牛乳
 を前に述べし割合にて稀釋貯蓄して用ひるを可とす若し
 牛乳を得ること能はざる時は煉乳を用ふべし又如何に僻
 地にて不便なりとも煉乳は罐を開かざれば長く變敗する
 此も得る故に煉乳を得ることの出來ざる地方は少く若し
 工營品は決して三ヶ月前に用ふべからず往々産婆又は
 備人の言に迷ひ澱粉質にて製する種々の營食品を用ひ爲
 意の上にも注意して前に述べし個條を心得となし養育法

を誤らざる様になされたし小兒三ヶ月を経過すれば牛乳
 一合に大麥粉小麥粉燕麥粉等三匁と水二合位砂糖四匁を
 入れて煮沸たる液を混じて用ふべし夫より追々成長する
 に從て右の粉を多く入れて宜しきも牛乳一合中へ六匁よ
 り多く入るべからず六七ヶ月經て小兒門齒を生ずる時は
 粥類即ち乾麵麩麵小麥大麥米等を牛乳又は稀釋き肉羹
 汁にて煮て用ふるも宜し門齒完備する時は乳汁を以て主
 なる養分となし外に少し宛父母の食膳中消化し易きもの
 を與ふるも良し此の時も茶珈琲等を與ふべからず夫より漸
 々に穀食を與へ小兒拾貳ヶ月より拾五ヶ月位に至りて發
 育宜しき時は粥雜煮等を與へて軟かき時は米飯を與ふる

も宜し小兒よ長く乳を興ふるは宜しきものなるも餘り長
く興ふる時は母親の身体疲勞するものなれば十二ヶ月よ
り十五ヶ月位を経て發育宜しく強壯なる時は漸々に乳離す
べし即ち始めは晝に興ふる度に減じて前に述べし牛乳を
入れたる粥類を用ひ夫より追々に晝の授乳を止め朝夕を
となし次第で朝夕も止める様にすべし急に乳離すは宜し
からず又夏季等の如き胃腸を害し易き時は乳離すべから
ず餘り早く澱粉食を興ふる時は便秘下痢又は痙攣等を起
し死するおとあるものなれば能く注意すべし又小兒の下
痢を發する時は牛乳を止め卵の白味に五勺位の水を加へ
砂糖小許と食鹽を入れて煮沸して興ふるか又は牛乳等

の肉羹汁を興へ猶ほ下痢の止まざる時は醫師の治療を求
むべし
小兒六七ヶ月に至れば肉羹汁に牛乳を加ふるか又は小
粉燕麥米等の粉は卵の黄味を入れて砂糖小許と食鹽を入
れて適宜の加減をなし興ふるも可なり肉羹汁を作るには
新鮮なる牛肉鶏肉等の五十匁に水三合位を入れて能く煮
沸し布にて漉して能く搾り又毛篩にて漉し此に卵の黄味
を入れて小許の食鹽と砂糖にて味を附けて興ふべし

一年以上の小兒養育法

小兒齒牙發生すると同時に口中の状態も變りて唾液胃液

腸液等の分泌も漸く盛んになるものなれば此時は乳汁の外
粥魚肉(刺味)又は脂肪少きものを養又は焼きて軟かき肉を
細挫きたるもの温飽蕎麥麵麩等の消化し易き様湯に入れ
て柔かに煮たるもの等と與へ十二ヶ月より十五ヶ月位に
至れば消化し易き野菜豆類芋類等の少し許と與へ満二年
位より消化器も發育し齒も大槪生へ揃ひ口も大くなり咀
嚼の力も増し唾液の分泌も多くなり胃の腑も袋の如くな
るものなれば此時は柔らかく肉牛肉等を前より少しは多
く與へ且つ米飯豆類芋類等も害なきものなれば少しづ
く混せて食はしむるも宜し又砂糖を多量に與ふる時は口
及び胃を害する故成べく少量を與ふるを宜しとす食物は

程能く温めて與へ冷た過ぎたり熱過ぎるは口内及び胃を
害する故注意すべし
小兒に食物を與ふるには度数及び量を定めて與へ決して
過べからず
食物は通常米飯麥飯温飽蕎麥麵麩粥等凡て善く煮たるも
のを宜しとす
副食物は消化し易き者は淡白なる魚肉即ち鮭鱒鯉鯛比良
魚鱈等を煮又は焼き汁よ作り又は生にて食するは宜しき
も餘り脂肪多きもの鹽藏品となしたるものは宜しからず
獸の肉鳥肉等も成る丈け年若きものを宜しとす此を汁と
なすか又は細挫して煮又は焼きたるを良とす然れども滋

養どなるものは必しも鳥獸の肉のみならず魚肉は消化し
 易くして滋養分に富むものにして新しき野菜は血液を新
 鮮しくなすものなれば魚肉鳥獸の肉野菜等を取り混せて
 與ふるを宜しとす決して一方にのみ偏るべからず
 野菜は消化し難きもの多きものなれば大豆は大豆腐又は軟か
 馬鈴薯豆等の柔かき煮たるものは良し豆は豆腐又は軟か
 く煮たるものは滋養に富むものなれば大豆は大豆腐又は軟か
 消化悪しくして害あり牛蒡蓮根南瓜甘薯等は消化悪しき
 ものなれば食せざるを宜しとす
 料理に用ひる醬油味淋砂糖饅節混布味噌等も皆宜し殊に
 味噌の滋養多きものなれば食するを宜しとす

飲料は煮沸したる清水牛乳等を良とす又薄き茶麥湯等も
 宜し酒類濃き茶珈琲等は宜しからず小兒下痢等のある時
 は粥汁葛湯玉子湯等を與ふるも宜し
 嗜好物としては輕燒煎餅水飴麵カステラ等に於て餅菓
 子類は餘り砂糖を多量に含む故宜しからず若し與ふる時
 は甘味少きものを宜しとす乾菓子團子牡丹餅及び脂肪濃
 き菓子等は與ふべからず
 食事の終りたる時は直に清水又は微温湯にて口内を清洗
 し成るべく早くより含嗽すること覚えしむべし世間に
 て此を怠るに由り齒齲齒口内炎等を起すものなり
 小兒の務めて鼻にて呼吸すること慣れしむべし鼻にて

呼吸する時は口を閉づる故に口内も清潔になり肺に入る空
 氣は鼻中を通過する間に塵埃を除き且つ温暖となる故
 に氣管枝加答兒肺の病を防ぐことを得るなり
 容姿を美になすは人皆欲する所に於て此は先天の者に
 如何にも爲すゑと能はずと考ふるは誤りて人の心は教育
 にて善どもなり悪どもなる如く容姿も教養に由て如何に
 静座佇立歩行等の際他物に憑らしめたり身体を俯屈した
 り斜になる等は宜しからず必ず左右の兩肩を同じ高さ
 なし書物等を見るに眼を近くることなく言語を發する時
 は胸を前方に張り居るべし若し体を俯屈して書物又は

机ニ憑
 タル習
 ニテ偏
 タル姿
 ソリ



正シキ姿



正シキ姿



書見をなし其れが習慣となりたる時は背虫(佝僂病)となり
 又斜どなる時は正しき位置等の圖を左に掲ぐ若し体を屈す
 る習慣ある時は内臓即ち肺心臓等を壓迫して身に害あ
 るものなり又幼少の時より身体を自由自在に規則正しく
 運動し得る様に慣れしめ女子は舞踏等をなさしむるも
 宜し聲音を美ならしむるには唱歌等を習はしめ漫り又高
 聲を發せしむることなく咽頭喉頭等の病に罹りたる時は
 速に治療すべし

種痘

痘瘡は最も恐るべき流行病にして生涯の中一度は大抵此

病に罹るものなり本病は小兒を侵すこと多き者にして流
 行時には小兒及び壯年者此病に罹り又此病に罹りたるも
 の、過半数は死亡せりといふ若し治するも痘痕を殘し醜
 態くなることも多く實に恐るべき病なり英國の醫師センナ
 氏如何にかして此病を免るの法なきやと種々研究したる
 後ち千七百九拾六年に一童子に初めて牛痘を移植してよ
 り此病を免るゝことを發明し夫より漸々進みて今日の如
 く年々種痘を爲すことを怠らざれば恐るべき天然痘を免
 るゝことを得る様に至りたるなり
 痘瘡は生れてより十四五歳迄は最も罹り易く夫より年を
 加ふるに従て免病質となるものなれば此の年迄は年に一

百十六
 回宛は必ず種痘を行ふべきものなり種痘をなす前は小兒
 の病に罹りたるか否や又發熱の有無等を醫師に診察を受
 けて若し病もなく又熱もなき時は一回浴湯を爲して後移
 痘すべし後四五時を經れば少しく癢痒を感じ三日位に
 して赤色となり五日位にて小水泡を生じ漸々膨大し七八
 日位にして周縁赤色となり疱は膿じ十日より十二日
 位にして膨大の極に達し此時周縁は炎症性に發赤し其上
 り疱は漸々乾痂となり七八日を經れば薄紅き痕を残して
 治す
 種痘後五日位は入浴せざるを宜とす(脚湯は差支へなし
 此れ創面を摩擦洗滌する等にて折角植へたる種子を洗ひ

百十七
 落し又は他の病菌の入り時は害を及ぼすことあるものな
 ればなり又發熱せざる間は常の如く家内にて遊戯せしむ
 るも宜し大抵は種痘後は九日に至れば疱に充分に膿を有
 つものにして此時には小兒不安の状態となり渴を覺え寒
 熱相往來して食欲減ずるものなるも二三日にして快復す
 るものなり
 種痘後七日位にして種痘醫より一回診察を受けて種痘證を
 受くべし種痘は感受せざるも害なきものにして一回にて
 感受せざる時は幾回も行ふべし
 種痘をなすには種苗を撰ぶ必要なり決して他の小兒
 の腕より取るべからず若し種苗を有つ小兒に結核梅毒癩

病皮膚病等のある時は此迄健全なる小兒に種痘の爲めに
 病毒を種植救ふべからざるの不幸に陥ることあるものな
 れば痘苗は必ず無病なる犢牛に植えたる物より取りたる
 新鮮なるものを撰びてなすべし
 種痘の時期は小兒生後二ヶ月以上に至れば一回行ふべし
 成べく早く行ふを宜しとす早きは熱も少く又苦痛を感
 ずることなしに経過するものなり只早ければ種痘醫は種
 植の数を少なくす故にして小兒に害をなす如きとはなし
 種痘の部位は左右上膊の上内側に四五個宛種えべし種痘
 中襪衣は時々洗濯して清潔なる地合の柔軟かきものを
 ふべし(若し硬さは洗滌して清潔なる地合の柔軟かきものを
 用)食物は別に

毒断するに及ばず消化し易きものにて可なり
 種痘中は痘を抓把せざる様注意すべし若し熱度の高く昇りた
 る時又感冒に罹らざる様注意すべし醫師の診察を受くべし

小兒の疾病并に養生法

小兒は身体軟弱にして抵抗力少きが爲めに諸種の病に犯
 されること多きものなり此内最も病に罹り易くして且つ
 死亡数の多きは一年未滿にして夫より一年毎に死亡数を
 少くし六年以上に至れば大に減するものなり此年齢の間
 は大抵温暖に保ち過ぐると食物を與へ過ぐるとに由て病

を起し死亡すること多きものにして小兒の成長するに從
 て抵抗力を増し病に罹ること少く從て死亡數も少くなる
 なり母親は日々小兒を扱ふものなれば能く注意して身體
 を改め置くべし此病に罹り醫師の診察を受くる際なを常
 よりも有るおどか無き事か等を答ふるに便なり其他母親
 は小兒の生れてより以來無病なるか又は病に罹りたるか
 若し病に罹りたる時は何病なりしか又或は痘は初めは生後
 何日位にて種痘を善感せしや否や又或は痘は初めは生後
 より何回せしや又善感は何回なるや等を肥臆し居りて初め
 健康なる小兒は皮膚紅色に肉緊まりて能く眠ひり食欲平

にして活潑なる運動をなし眼は明りとして大便の通じ能
 く且つ軟かにして黄色に凝塊なく恰も半ば煮たる卵の如
 く臭気なく小水又多くして色と臭気とのなきものなり
 母親は常に小兒の狀態に注意し其啼聲并に容態にて空腹
 なるか疼痛又は苦痛などのあるやを察し若し異常ある時
 は速かに醫師の診察を受くべし又夜中杯急に小兒の咽
 が笛を吹く如く又啼く如く呼吸劇しくなりて苦しき咳
 嗽をなす時は危険なる(實扶帝里亞格魯布)病を起すことあ
 れば速に醫師の診察を受くべし
 糜爛小兒の能く肥満りたるものなり常に清潔になし時
 前後腋窩頸前の皮膚糜爛するものなり常に清潔になし時

々入浴せしめて洗ひ後能く乾燥きたる柔かき布片にて拭
ひ葛の粉天花粉又は醫師より粉薬を乞ふて散布し置くべ
し又其部硬くなりて腫張るか又は裂傷の如くなりたる時
は速に醫師の治療を受くべし

小兒の便秘

りどて漫りに賣薬なせを與ふるは宜しからず小兒は胃腸
の病に罹り易く若し此等の病に罹りたる時は初めは便秘
を起して少しく熱を發するものなれども放て置く時は腹
痛下痢青色便水様便等を起して時々啼泣て苦痛の狀態を
呈はし且つ痙攣を起すおあるものなれば能く注意して
少しにても便秘あり常よりも熱ある時は速に醫師の診察

を受くべし殊に人工營養にて養育する小兒は授乳壘の掃
除の行き届かざるか又は牛乳の稀釋め方の悪しきか腐敗
りたる乳汁を與ふる等に由て起ることも多く生母又は乳母
にて養ふものには少し又生草にて飼養したる乳汁より搾
りたる乳汁は下痢を起し易きものなれば他の牛乳と換へ
て與ふるを宜ます

小兒乳を吐くは

過量の乳汁を一度に與ふることより起る
ものなれば此時は乳汁の量を減じて與ふべし
驚口瘡は乳を嘔みたる後ち口内を清潔にせざると乳房又
は授乳壘の不潔なるより起るものなれば授乳後は毎回清
き水にて布片を濕して丁寧に拭ふ時は此病を起すこと少

百二十四
し此病は初め口内に少き白點を生じ此を拭ふも除れず漸々増加して口内に擴がり哺乳すること能はずして死亡す
鼻加答兒及び扁桃腺炎も危険なる病なれば若し此等の病に罹りたる時は小兒を汗の發る程暖き室に置き食糧又は重曹を二百倍位の微温湯にて溶解したる液にて吸入を爲さしめ又は脚湯をなし且つ醫師の診察を受くべし
眼は最も大切なるものなれば殊に注意すべし盲目者の多數は分娩時に其直後の手當の悪しき爲めに起るものなるおとは産褥中に述べし如くにて斜視等も幼稚なる時に母親の氣が就きて早く良眼科醫の治療を受くる時は全く

治癒するものなり
耳漏は耳の中より惡臭ある帶黄色の液又は膿の分泌る病よて早く適當の手當をなす時は治するも放置する時は耳聾となるものなれば注意して早く治療すべし
小兒睡眠中驚はれるか又は動き齒を噛み急に啼き出す等は腦に刺戟ある徴候なれば母親は此状態を醫に告げて手當を受くべし
小兒蛔虫のある時は睡眠中驚はれ又は鼻の孔を掘くり鼻下を紅くなし又瘰癧を發すおとあり
跛小兒の片足を牽く時は腰又は足の深部に病のある徴候なれば母親は能く注意して若し見附けたる時は直に醫

師の診察を受くべし

腺病

腺病は小兒に最も多き病にして發熱もなく苦痛もなき病なれば大抵は注意せずして放置するものにして只世の中にて虚弱なる人は此病又罹りたる人多し此病に罹りたる人は皮膚薄弱軟美麗にして毛髮細軟後頭部大にして上唇厚く頸部の水腫腺腫(瘰癧)れ身體諸部に發疹を生じ且つ潰瘍を生じ易く眼瞼糜爛し耳漏を生じ所置の宜しからざる時は醜き瘰癧を生じ且つ視力聴力等を害し又種々の骨病を發するものにして此體質の人は成長の後肺勞を

起すこと多き者なれば注意すべし此等の病は先天に生ずるものにして虚弱なる兩親より生れる小兒に多きも又母乳并に乳母の乳無きか又は乳離の早きに過ぎたるか牛乳煉乳の粉等に養ひたる小兒に後天に生ずることあり此病に罹りたる時は清潔なる空氣中(殊に海岸は宜し)に住ましめ且つ牛乳鶏卵魚肉鳥獸肉等の如き滋養物を與へて適宜の運動をなさしめ身體を強壯にするおとを專一に心懸くべし

佝僂病腺病に能く類似して生れてより十二ヶ月より十五ヶ月位經過するも立歩すること能はざるものにして療養法は腺病と同一なり

傳染病の種類は多きものなれども小兒の最も犯され易き病にて病毒の感染する方法に由て左の如く甲乙丙の三種類となす

甲に述ぶるものは病人又は病毒と觸れるか又は觸れざるも其室内にて空氣の媒介にて感染するものなり即ち痘瘡、假痘、水痘、實扶帝里亞、猩紅熱、丹毒、百日咳、麻疹、流行感冒、流行性耳下腺炎、風疹、肺勞等なり

乙に述ぶるものは病毒飲食物に入るか又は手に附着して口に入る等にて發するものにして赤痢、虎列刺、腸室扶斯等

丙に述ぶる病は直接に病毒の附着したる時起るものにして疥癬、頭部濕疹、鱗癬、匍行疹、大水泡疹、眼病にてはトラホー

ム、膿漏性結膜炎、流行性結膜炎等なり

傳染病豫防法

甲に属する疾病殊に痘瘡、假痘、水痘等の流行時は速かに種痘を行ひ且つ該患者に接せざる様にすべし實扶帝里亞、格魯布等は最も恐るべき病よしして此れが爲め小兒の生命を奪はるゝおと多きものなれば此病の流行時は小兒を外出させぬ様になし且つ家内に類似の病人の出來たる時は他

の健康児は速に隔て且つ日々口内を検査し若し少しにて
 も白き点の生じたる時は速に醫師の診察を受くべし此病
 は初め感胃の如く少しく咳嗽を發し又は少しも氣の注か
 ざる内に發するおとあり
 猩紅熱も始めは感胃の如くにして熱を發し口内及び舌は
 紅色にして猫舌の如く腫張れ且つ紅色の發疹項部より始
 まり胸部頭部に擴がり遂に全身に生じ快復の後には全身の
 皮膚剝離するものなり百日咳も始めは感胃の如く漸々呼
 吸を引く如くなりて咳嗽を續け爲めに顔面は紅色となり
 乳汁又は食物を吐くおとあれども咳嗽のなき時は常に變
 ることなく大抵無熱なり

麻疹も皮膚及び粘膜面に發疹する病にして熱あるを通例
 とす此は体質と流行の性質とに由り重き時と輕き時とあ
 り大抵一回にて免病質となるも時としては二回以上罹る
 ことあり輕き流行時には別に避くるにも及ばぬものなり
 流行性感胃は初め發熱頭痛腰痛等あり春秋の候に流行す
 るおと多く一週間に解熱するものなり
 流行性耳下腺炎始め感胃の如く發熱し耳下腺の腫張する
 病にして主に感胃より來るものなれば感胃に罹らざる様
 注意すべし
 肺勞は大人のと異なることなし
 乙に屬する傳染病は口より入る病なれば凡て流行時には

飲食物も注意し何品にても一度煮沸したるものを飲食す
 べし又茶碗箸等の如き食器も沸たる湯にて洗ふべし病人
 の吐きたる物唾液襪の如きものは醫師の指揮に従ひて
 消毒すべし
 丙に属する病は直に病毒に觸れるに由て起る病にして別
 に流行時なきものなれば此病に罹る人に近接かざる様に
 注意すべし若し感染したる時は早く醫師の治療を受くべ
 し
 以上述べし外先天性に來る傳染病は先天梅毒及び腦膜炎
 なり
 先天梅毒は両親の内梅毒に罹りたる時に生れたる小兒に

して大抵三四ヶ月にして流産するか又は月足らずにて生
 れるおと多く臨月迄保つことは稀れなり此病を有する小
 兒は皮膚又は粘膜に發疹多く且つ小鼻の兩側鼻孔陰部
 肛門の周圍等糜爛れるものにして治療の宜しき時は稀れ
 には治することあるも死亡すること多き者なり
 結核性腦膜炎は初めの状態は胃腸の病に類し嘔吐下痢又
 は便秘ありて食欲減じ小兒不穩にして睡眠中に啼泣さ
 又は驚怖し又は苦痛の状をなし次で痙攣を發し漸々重り
 て死すること多く本病に罹りたる患兒中治すること少く
 若し治することも痴鈍となること多く實に恐るべき病なり

体温器の用法

体温計は古來より三種ありたれども當今にては攝氏を用ひ此は氷点を零度とし沸騰點を百度として度目を附たるものにして當時一般に用ひらるゝは留點附と稱して上昇して此部に水銀の留まりて降下らざるものにして使用に便なり此器も昇降の合はざるもの多ければ成べく中央氣象臺又は顯微鏡院の檢定を経たるものを買ひ求むべし用法は小兒の腋窩又は上臑を腹に向て屈し此部に挿入し十分間経て靜かに取りて見る時は水銀柱の昇り居るものに



べし然るゝ小兒は動き易きと腋窩の小なる爲の体温器を

充分に包圍し能はざる故に体温器の尖端を油を塗りて靜かに肛門内に一寸位挿入し十分間にて檢するも宜し但し肛門にて計る時の体温は腋窩にて計りたる時より五分高きは通常なれば心得置くこと必要なり
 小兒の体温は大人と同一にして三十六度半より三十七度を平均とし三十八度迄は著しき害なきも三十八度以上昇る時は注意して醫師の診察を受くべし四十度以上數日持續する時は生命を危ふするものなり

小兒に藥劑の飲ませ方

小兒に藥劑を與ふるには散藥は示指又は中指の尖端を乳

汁又は水にて濕し小兒の口内殊に舌に塗り附け後乳にて
も水にても飲ませる時は少しも撒らすおとなくして容易
なり又水を與ふるには小兒を片手抱き片手にて水薬
を匙にて掬ひ側より小兒の鼻翼を壓す時は口を開く此時
匙にて口に入れるなり

牛乳の貯蓄法

牛乳は必ず五分乃至十分間煮沸すべし此を瓶に入れたる
まゝ密栓して貯へ置くべし殊に夏時は清水に入れ置くべ
し
授乳壺は護謨管の短かき繼ぎ目など皆硝子にて製りたる

ものを宜しとす此れ掃除するに便利なると護謨の短かき
爲め傍に瓶を持ち居らざれば小兒の口に届かざる故止な
く附添居りて乳汁の盡たる時は離すなり又乳頭の護謨は
小兒の嘔ふに適宜なるものを撰ぶべし若し大き過ぎる時
は乳汁出過ぎる爲めに咽せ返へり小過ぎる時は乳汁の
出るおと少なき爲めに哺難なるものなり又護謨管長き
時は其面に附着したる乳汁敗腐し且つ小兒に哺はせて放
置する故乳汁の盡くるも小兒吸哺する故に空氣胃中に入
りて害をなすものなり
授乳壺に入れて一回與へたる時若し残りたる時は必ず放
棄すべし授乳壺もゴムにて作りたる乳頭も直ちに清水に

百三十八
て洗ひ後清水中に浸し置き取り交へて使用ふ様に二三
組調へ置くべし若し授乳器の掃除届かざる時は小兒口内
炎及び胃腸等を害すものなり

妊婦必讀
安産の心得
附育兒法終

大正八年六月十五日印刷
大正八年六月二十日發行

必讀安産の心得奥附
正價金六拾五錢

不許複製

編輯者 東京市日本橋區金吹町五番地 内海 懿 弘
發行所 大阪市東區南農人町二丁目廿四番地 前田 千代 藏
印刷所 東京市日本橋區金吹町五番地 平安堂印刷所

發行所
東京市日本橋區金吹町五番地 平安堂書店
振替東京二四九一七番
大阪市東區南農人町二丁目 前田大文館
振替大阪四二九五四番

百三十八
て洗ひ後清水中に浸し置き取り交へて使用ふ様に二三
組調へ置くべし若し授乳器の掃除届かざる時は小児口内
炎及び胃腸等を害すものなり

妊婦必讀
安産の心得
附 育兒法 終

大正八年六月十五日印刷
大正八年六月二十日發行

妊婦必讀 安産の心得 附
正價金六拾五錢

不許複製

編輯者 兼 東京市日本橋區金吹町五番地 内海 懿 弘
發行所 兼 大阪市東區南農人町二丁目廿四番地 前田 千代 藏
印刷所 兼 東京市日本橋區金吹町五番地 平安堂印刷所

發行所
東京市日本橋區金吹町五番地 平安堂書店
振替東京二四九一七番
大阪市東區南農人町二丁目 前田大文館
振替大阪四二九五四番

175
425

終

